豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ

松山

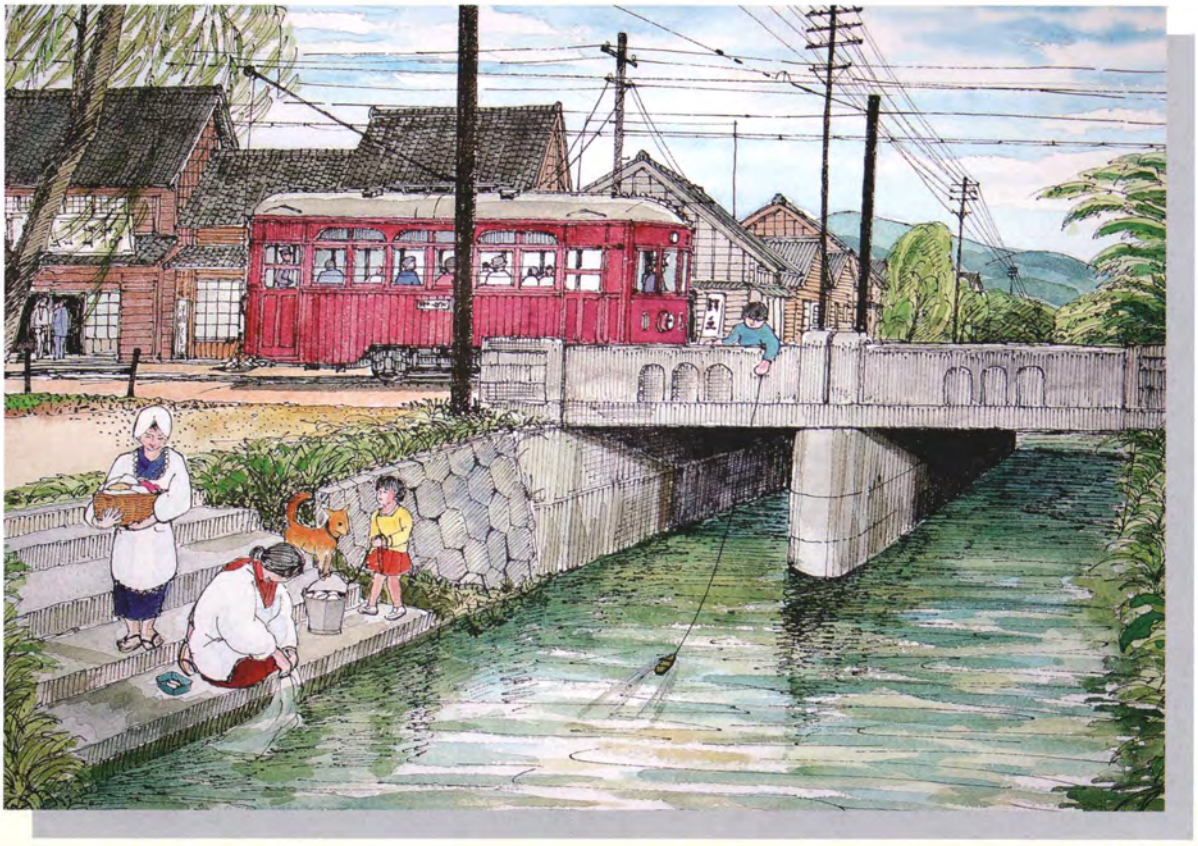
豊橋校区史 19

Matsuyama

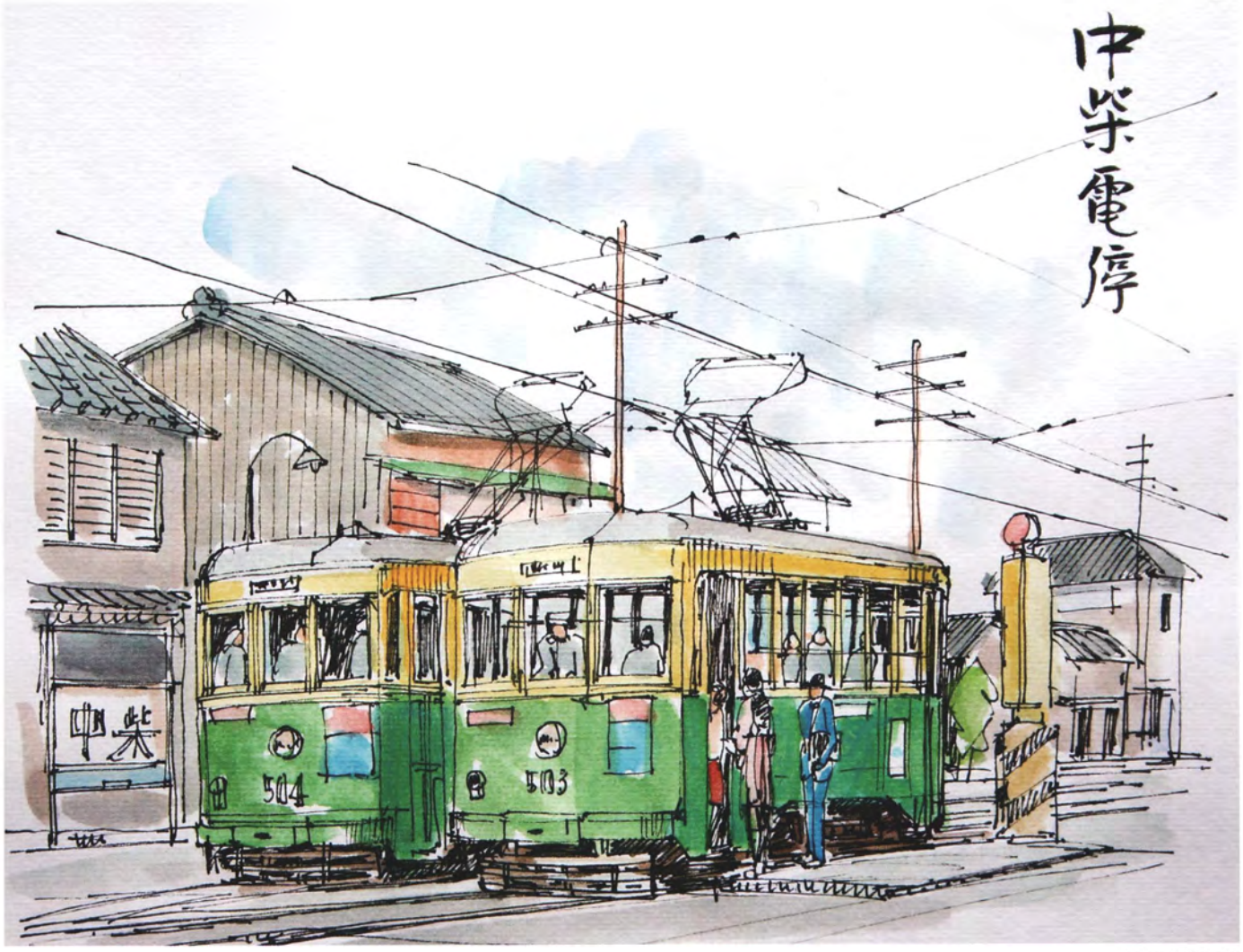
写真撮影：小林春吉氏

豊橋市制施行100周年記念

校区のあゆみ 松 山



牟呂用水



市電中柴電停

新停車場通り

広小路通り

発刊によせて

平成18年度
豊橋市総代会長
西　義雄

このたび、豊橋市制施行100周年を記念し、「豊橋校区史～校区のあゆみ」を発刊する運びとなりました。皆様のご協力により記念事業にすばらしい彩りを添えることができましたことを、心よりうれしく思います。

この事業は、100年の節目を契機に地域の歴史や文化、自然などを改めて見つめ直し、将来の夢に思いを馳せていただくものであり、51校区すべてが足並みを揃え発刊できたことに、たいへん大きな意義を感じています。また、各校区におきましては、編集委員を中心に多くの地域住民の皆さんが資料の収集や原稿の執筆などに携わられたことと思います。こうした取組みを通し、地域の絆がさらに深まったものと考えています。

地域イベントの開催を含め「市民が主役」を合言葉に行政と協働で進めてきた100周年記念事業ですが、多くの地域住民の方々が様々な形で挙って参加できたことが何よりの成果であったと思います。今後におきましても、この100周年記念事業を一過性のものに終わらせるのではなく、次の100年に繋げていかなければならないと考えています。

最後に、本校区史の発刊にあたり、多大なご協力を頂いた多くの皆様に改めてお礼を申し上げ、ごあいさつとさせていただきます。

平成18年度
松山校区総代会長
藤森孝男

豊橋市制100周年記念事業として、豊橋校区史～校区のあゆみを作りたいという話があったのは、平成16年６月のことでありました。その話を聞いた時に松山校区としては必要な経験と資料の乏しさをカバーするために、準備を急がなければならないと思いました。

校区役員会、総代会の承認を得て６月のうちに組織づくりをスタートさせ、校区24町内から推薦された25名の校区史編纂委員によるチームが直ちに動き出しました。それから２年有余の時間をかけて、河合幸一校区史編纂委員長を中心とした委員の方々が協調し、活動して参りました。その集大成がこの校区史であります。平成18年に入って詰めの作業が手際よく行われ、記載内容の再点検、資料の適否について再検討が真剣また熱心に進められました。

お陰をもちまして「校区のあゆみ松山」は、豊橋市の中心市街地松山校区の歴史をふりかえり、この地域の発展とその未来像までを視野に入れた作品となりました。

終わりに編集にあたってご協力を賜りました関係者各位並びに、編集委員会の皆様には長期にわたる作業であっただけに、そのご尽力ご苦労に対しまして心より感謝を申し上げ、ご挨拶といたします。

目　次　CONTENTS

第１章　自然と環境

1　位置および概要 …… 7

2　気候と災害 …… 7

3　地形と地質 …… 9

4　柳生川（薫瀬川） …… 10

5　松山校区の移り変り …… 11

（1）町名の移り変り …… 11

（2）世帯数・人口の移り変り …… 12

第２章　歴史と生活

1　松山校区の歴史 …… 13

（1）古代から中世 …… 13

牛川原人、幡太の庄、

幻の喜見寺砦、花ヶ崎村

（2）近世から大正時代 …… 15

奥郡街道、吉田の駒曳き銭、

首斬地蔵尊、咳地蔵尊、

参州吉田天神社、武徳殿

（3）昭和時代（敗戦まで） …… 19

配給制と耐乏生活、

市民の戦争への協力、

戦時教育と学徒動員、

豊橋空襲、本土決戦、敗戦、

敗戦から戦後へ、闇市の出現

（4）復興の槌音 …… 24

駅前大通り

広小路通り（新停車場通り）

2　松山校区の産業 …… 29

（1）経済的中心地としての校区の現状と課題 …… 29

（2）蚕都豊橋 …… 32

3　交通網 …… 33

（1）東海道線と豊橋駅の開業 …… 33

（2）豊川鉄道・吉田駅 …… 35

（3）豊橋の市内電車 …… 35

4　伸びゆく松山 …… 35

（1）東口駅南地区都市拠点開発事業 …… 35

（2）総合文化学習センター（仮称）整備事業 …… 36

第３章　教育と文化

1　教育の充実 …… 37

（1）寺子屋の教育 …… 37

（2）初等教育（旧制） …… 37

狭間尋常小学校

松山尋常小学校

中部中学校

（3）中等教育（旧制） …… 41

愛知県豊橋中学校

2　寺社と史跡 …… 42

（1）吉田御坊 …… 42

（2）正林寺 …… 43

（3）唯心寺 …… 43

（4）郷村松山神社 …… 44

（5）諏訪神社 …… 45

（6）大己貴神社 …… 45

（7）白山比咩神社 …… 45

（8）素盞嗚神社 …… 46

（9）村社神明社 …… 47

（10）七面社 …… 47

松山校区略年表 …… 48

編集後記 …… 52

表紙：ペデストリアンデッキから見た駅前大通り

第1章　自然と環境

1　位置および概要

松山小学校校区は、豊橋市役所より南西に700ｍのところに位置し、その範囲は、ＪＲ東海道本線より東、旧東海道の札木通りより南へ柳生川まで、東は向山公園、向山霊園および新川校区と隣接し、北は松葉校区と、南は福岡、つつじが丘の両校区と境を接している。

松山校区図

明治21年（1888）に東海道線豊橋停車場が開設され、駅とともに育ち、駅とともに都市の形態を変えながら駅を要に扇状に南西に広がり、市の産業・商業の中心地へと発展していった。さらに平成に入ると、ＪＲ豊橋駅は橋上駅舎として大改造され、広小路通り商店街は、ルネッサンス計画、総合再生基本計画による「住める街づくり」を推進し、今や広域中心型の商店街へと成長していった。

校区は、駅前大通１丁目、同２丁目、同３丁目、同３丁目１、広小路１丁目、同２丁目、広小路２丁目コンチェルト、同３丁目、花園町、萱町、松葉町１丁目西、同１丁目東、新本町２区、同３区、大国町、大手中柴町、中柴町、東小田原町、西小田原町、東松山町、西松山町、南松山町、中松山町、前田南町の24の区域によって構成され、世帯数は2,918世帯、人口は6,748人でこれを男女別にみると、男性が3,250人、女性が3,498人となっている。（平成18年４月１日調べ）

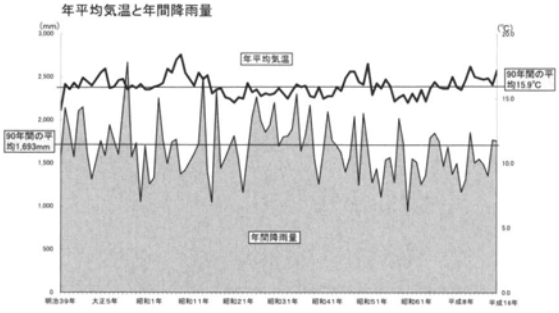
主な公共施設には、名古屋地方裁判所豊橋支所、名古屋家庭裁判所豊橋支所等および、国の豊橋地方合同庁舎があり、検察庁、税務署、職業安定所、法務局豊橋支局、労働基準監督署等が入居し執務している。

校区民は、豊橋を代表する校区ということを自覚しつつ、街の美化運動、青少年の非行防止、少年団の育成、防犯等には特に力を注ぎ、明るい町づくりに努力している。一方、文化活動も活発で、校区単位、町単位でそれぞれ発表会や展示会を開催し、校区民の高い関心を得ている。念願だった校区市民館が平成４年（1992）４月に開館し、地区市民館も新築なった中消防署に移転（平成５年４月１日）し、更なる活動が期待されるのである。

2　気候と災害

（1）気候のようす

南方を太平洋の暖流が流れ、東と北は山に囲まれ比較的温暖な気候であるが、冬には北西の季節風「三河のからっ風」が吹きまくり、体感温度は気温より更に低く感ずる。雪はまれにちらつく程度で積もることは滅多にない。



気象図

年間の平均気温は16.0℃、最も暑かった夏は昭和９年、平成６年と平成13年の38℃、寒かった冬は昭和２年の－9.0℃であった。年間の降雨量は1,678㎜、晴の日は全体の58.6%、曇の日は31.0%、雨天は10.4%であった。

(2) 竜巻による災害

豊橋を襲った竜巻は11回に及んでいる。そのうち、松山校区に大きな被害をもたらした竜巻は、昭和16年（1941）11月28日の竜巻と、平成11年（1999）９月24日の２回である。

昭和16年11月28日　竜巻は、午前６時30分豊橋市大崎町付近で発生、北東に移動して橋良町、柳生町、向山町、前田南町、舟原町、牛川町に被害を与えている。そして、その移動範囲は幅70ｍ～100ｍ、延長約８㎞に達している。

この竜巻で前田南町２丁目の日蓮正宗勧持院の大屋根が巻き上げられ、吹っ飛んでいる。このことについて、同輩の浅井委員は、幼少の頃「目覚めたら屋根が無く、青空が見えたのを覚えている」と言っていた。死者12名、重傷者30名、軽傷者147名、家屋の全壊44戸、半壊303戸、一部損壊1,000戸余りの被害をもたらしている。

平成11年９月24日　午前11時５分頃、豊橋市野依町付近で発生した竜巻は、市街地に大きな被害を与えながら北北東に進み、午前11時18分頃には豊橋市役所東側を通過、午前11時21分には豊川市との境界付近に達し、勢力を弱めながら進路をやや東寄りに変えて進み、午前11時30分頃には宝飯郡一宮町長山まで達し、消滅している。

竜巻の経路

竜巻の移動速度は、45㎞/h、回転は左回り、竜巻の規模は車が約５ｍ持ち上げられていること、住宅の全壊が多かったこと、電柱が多数倒れていることなどの状況から竜巻の強さを表わす「藤田スケール」で「Ｆ３」とされた。

この災害では、特に豊橋市立中部中学校において人的被害が大きかった。生徒の怪我が多く、119番通報するも救急車の対応が間に合わず、職員の車で重傷者から順番に病院に搬送することとした。被害者は、生徒200名、教師５名で、病院搬送者28名、いずれも切傷、切創者であった。

豊橋市において過去に発生した竜巻

発生年月日	概　　要
明治 45. 8. 24	渥美郡老津町にて発生、高師村大崎より海上に出て、宝飯郡前芝村に上陸。小坂井村、国府町を経て八幡村で消滅。20～30m、延長12km、同日幡豆郡、碧海郡にも発生
昭和 4. 12. 20	午後4時30分頃、渥美郡二川町三ツ家にて発生
9. 6. 7	午前9時30分頃、渥美郡二川町寺沢にて発生
11. 8. 13	午後4時頃、豊橋市吉前、宝飯郡前芝海岸方面に発生
16. 11. 28	午前6時30分頃、豊橋市大崎町に発生、北東に移動して橋良町、柳生町、向山町、前田南町、小畷町、舟原町、西新町、牛川町が被害を受けた。幅70～100m、延長8km
25. 9. 3	午後2時10分頃、渥美郡二川町海岸で発生
39. 7. 19	午前6時50分頃、豊橋市大岩町地内から雲谷地内にかけて発生。幅50m、延長約5km
44. 12. 7	午後6時2分頃、西橋良町付近に発生し、北北東に移動し、中郷町、関屋町、下地町、大村町大蚊里に至る。幅約150m、延長約4kmにわたり市街地を縦断
昭和 57. 11. 30	午前5時56分頃、若松町地内で発生東進後、小島町北部から北上し、富士見町で消滅したと推定される。
平成 6. 9. 29	午後5時20分頃、伊古部町付近で発生。北西に進み東赤沢町、富士見台を経て大崎町付近で消滅

3　地形と地質

日本列島が今のような姿につくりあげられたのは、約50万年前から始まった中央構造線による大規模な地殻変動によるものという学説がある。そして、幾つかの断層の発生と激しい土地の隆起とによって、木曽・赤石山脈などの高い山や深い谷が生まれた。

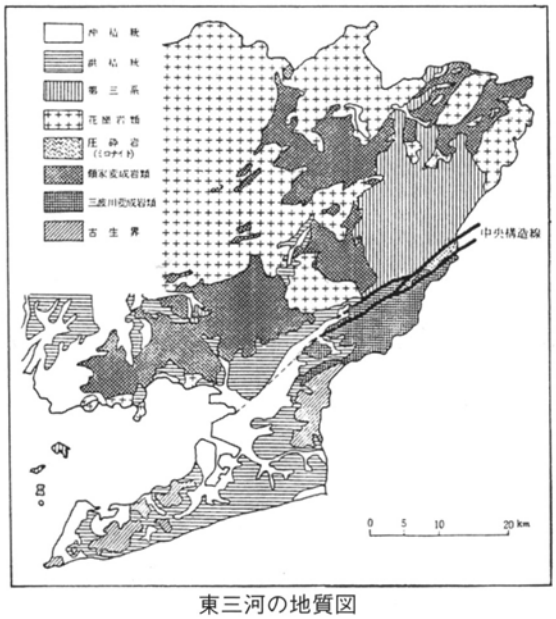
今からおよそ20万年前の豊川は、豊橋の市街地付近を通り抜け、太平洋に流れていた。

その後、渥美曲流運動と呼ばれる地殻変動が起り、渥美一帯が上昇を始めた。

その結果、豊川は、流路を変え三河湾へ流れるようになった。

豊川がつくった地形

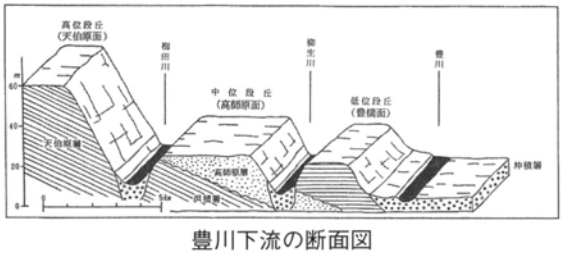
豊橋駅や豊橋市の中心部は、２～３万年ぐらい前に豊川によって運搬された堆積物によってつくられた。標高を見てみると豊橋市役所西が10ｍ、花田町で７ｍ、牟呂町で５ｍ、というように西に向かって千分の１内外の勾配を見せており、高師原台地のような渥美曲隆運動の影響は表れていない。向山台地より新しい時代の堆積物によってできた段丘面ということができる。



東三河の地質図

松山町周辺は、標高５～７ｍで、広小路方面よりも１～２ｍ低い。豊橋台地が侵食によって幾分低くなった侵食面と考えられる。形成の時代は洪積世末の１～２万年ぐらいと推定される。

１万年よりも新しい時代を沖積世と呼んでいる。この沖積層は、豊川流域のうちでも河口付近から柳生川や梅田川の河口付近にかけて最も厚く分布しているのである。



豊川下流の断面図

渥美曲隆運動が永く活動しつづけたことを物語っている南高北低の地形をした福岡校区と、曲隆運動の影響を受けていない東高西低の地形をした松山校区とは対照的で面白い。

4　柳生川（薫瀬川）

文治５年（1189）当時この地域は「薫瀬」と呼ばれ、南を流れる川を薫瀬川（柳生川）という名で呼ばれていたと神明社（前田南町２丁目）の社伝にある。

柳生川沿いの潤地帯で始まった農業　紀元前３世紀ごろ大陸から渡来した弥生文化は、稲作の生産技術などの新技術を伴って日本の各地へ広がっていった。

豊川の流域では紀元前１世紀ごろから本格的な米づくりが始まったことが豊橋市瓜郷町の瓜郷遺跡の調査から明らかにされている。

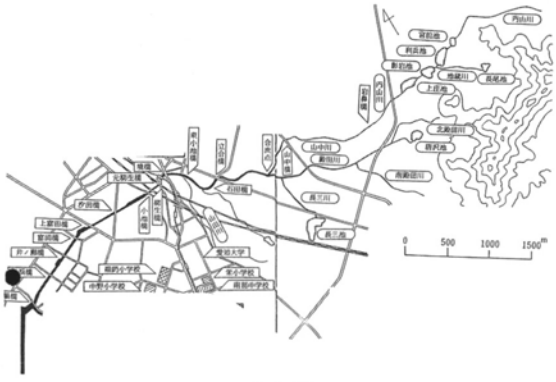
柳生川沿岸では北岸の豊橋市東脇貝塚の調査で瓜郷式土器が見つかっているので、ほぼ同じころ狩猟や採集の暮らしから農耕の暮らしへと変わっていったことがわかる。

弘長２年（1262）、正林寺が春缶栄燿尼により花ヶ崎村（松山町）に開基されたとある。ということは、この頃からすでに集落があったことを意味している。わが松山校区の発祥の地もこのあたりではないかと考えられるのである。

柳生川　柳生川の上流域はいくつかの支流に分かれている。大別すると、一つは内山川から山中川、柳生川へと下ってゆく水系、もう一つは殿田川から柳生川へと下る水系である。水源は、何れも静岡県との県境の山々からの沢水を集めたものである。

内山川は、国道１号線と交差する山中橋から２級河川山中川と名前を変える。一方、殿田川は、北殿田川、南殿田川、長三川など各支流と合流して更に南下する。山中川と殿田

川は、三輪町、佐藤町、向山町の境で合流し、ここで柳生川が誕生するのである。合流地点での川幅は20ｍぐらいで、平時の水量は川底が見える程度の深さしかない。



柳生川

小池橋の下流から、柳生川は柳生運河とも呼ばれている。正式には、豊橋市入船町から神野新田地先を柳生航路と言い、水深は基準面から1.5ｍ、幅12～30ｍ、延長4,150ｍとなっている。柳生運河も昭和の初め頃はこれを利用する船も多かったが、現在は利用する船もほとんどなくなった。利用度数が減少したのは、豊橋港が整備されたのと陸の交通が進歩したことのあらわれである。

ここより下流の運河は、富田橋、井ノ瀬橋、元浜橋、市場橋をくぐって豊橋港へ流れ出るのである。

5　松山校区の移り変り

(1) 町名の移り変り

現在の豊橋は、旧宝飯、渥美、八名の３郡にまたがっていて、古くは「穂の国」と呼ばれた。「穂」とは、稲の穂、麦の穂などで豊穣を表し、また、槍の穂、石塔の穂などは先端を意味し、地勢では穂高などの山々は高さを誇示した。東三河の最高峰本宮山から穂の名が生じたと言われている。山頂に穂の宮が祭られていたことによるものであろう。

豊橋の中心でもあった飽海、安久美とも書く「アクミ」は、綿津見族の主領安曇氏にちなんで付けられたものである。平安時代以降は伊勢神宮領の御厨御園があり、豊かな地域であったことがうかがわれる。その後、武士の台頭により鎌倉時代になって、豊川と朝倉川の合流地点に今橋城が築かれ、城下町の姿が造られ政治・権力・経済の中心となってきた。

大永２年（1522）、今橋を吉田と改める。

貞永年間から幕末まで吉田の城下町は表12町、裏12町の24町であった。東海道に面していたのが表町で、魚町より南は裏町であった。

明治２年（1869）、吉田藩を豊橋藩に改称する。吉田大橋の呼び名「豊橋」をとって地名とした。

明治22年（1889）、豊橋町ができると中柴村が編入され、明治39年（1906）豊橋市誕生と共に花田町も編入されて、市街の面影をつくった。花田町は非常に広く、字も16に及んだ。

昭和７年（1932）、市の南東部が開けて新しく前田南町ができた。

昭和20年（1945）、戦災にあった豊橋市は直ちに戦災復興整備事業を積極的に進め、昭和32年には主要道路が何とか整備されると、町名の大変革を行った。昭和34年（1959）のことである。

平成12年度には、花田町字石田が前田南町２丁目への合併を承諾、翌13年（2001）４月に届出を完了した。松山校区の大半が花田町を名乗っていたが、昭和34年の町名の改革により激減、ただ一つ残った花田町字石田も長い歴史に幕をおろしたのである。かくして松山校区から花田町という町名は消滅したのである。

町名の移り変り

駅前大通一丁目	北新起　狭間　稗田　西宿 西宿前　松葉の一部
駅前大通二丁目	狭間　花園　稗田　新銭の一部
駅前大通三丁目	市南　新銭　狭間　神明の一部 新川町
広小路一丁目	西宿　松葉の一部
広小路二丁目	花園　松葉　新銭　狭間の一部
広小路三丁目	清水　新銭　神明　紺屋の一部
花園町	魚町　清水　新銭　花園　三浦 松葉　旧抱六町　元浜町 豊楽町と変化
萱町	上伝馬　萱町　指笠　三浦 松葉　花園　本町
松葉町一丁目	萱町　松葉　西宿の一部
新本町	魚町　萱町　指笠　花園　本町 三浦
大国町	黒福　道六　吉田　市南の一部
中柴町	黒福　中柴　松山　道六の一部
東小田原町	間田　松山　中柴　稗田 東小田原　西小田原 新川新銭の一部
西小田原町	大山塚　於樹木　小田原　間田 稗田　北新起の一部
東松山町	黒福　角田　寺東　東郷　道六 吉田　前田南の一部
西松山町	塞神　東郷　中柴　西小田原 松山　松坂の一部
中松山町	黒福　寺東　東郷　道六　松山 中柴の一部
南松山町	塞神　寺東　東郷　深田　松山 松坂の一部
前田南町一丁目	前田南一区　前田南二区
前田南町二丁目	前田南三区　石田

(2) 世帯数、人口の移り変り

平成16年（市勢要覧の数値）を除き、国勢調査による数値を用いた。また、年次については旧松山小と旧狭間小が合併した年の直近の国勢調査年を当初とした。

人口の推移を見ると、昭和35年（1960）をピークに以降55年（1980）まで下りつづけている。理由はいろいろ考えられるが、ベビーブームに出生した方々が成人し、独立の時を迎え住まいを郊外に求めた事によるものと考えられる。それを支えたのが、オイル・ショックによる経済恐慌であり、車社会の定着であり、大型店舗の郊外進出であり、区画整理等によるものであろう。

世帯数・人口の移り変り　（戸・人）

年次／項目	昭和25年	昭和30年	昭和35年
世帯数	2,362	2,513	2,925
総数	11,884	13,432	14,070
男	5,664	6,400	6,781
女	6,220	7,032	7,289
年次／項目	**昭和40年**	**昭和45年**	**昭和50年**
世帯数	2,917	2,861	2,737
総数	13,408	11,795	10,191
男	6,336	5,486	4,748
女	7,072	6,309	5,443
年次／項目	**昭和55年**	**昭和60年**	**平成２年**
世帯数	2,603	2,443	2,600
総数	8,903	8,157	8,047
男	4,170	3,809	3,802
女	4,733	4,348	4,245
年次／項目	**平成７年**	**平成12年**	**平成16年**
世帯数	2,336	2,370	2,880
総数	6,678	6,346	6,684
男	3,161	3,026	3,171
女	3,517	3,320	3,513

第2章　歴 史 と 生 活

1　松山校区の歴史

(1) 古代から中世

①　牛川人

昭和32年（1957）７月、牛川町の石灰岩採石場で爆破作業をしたところ、山の南側高さ30ｍの石灰壁の裂け目の赤土の中から、ニホンムカシジカ・タヌキ・ハタネズミの獣骨と一緒に人骨らしいものが発見された。

この骨を東京大学人類学教室の鈴木尚教授に鑑定を依頼した。教授はこれらの骨の中の一つの骨に注目し、１年半にわたる綿密な研究の結果、衝撃的な発表に踏み切ったのである。こうして豊橋市から出土したわずか10㎝足らずの人骨片がわが国の考古学、人類学上の重要な発見ということで、世界の大きな関心を集めることになったのである。

更に、この発見から２年後の昭和34年（1959）２月、同じ場所で紅村弘氏が成人男性の大腿骨の破片を採集し「牛川第２人骨」と名づけた。

上腕骨から推定する初めの原人の身長は、135㎝の成人女性で、また、牛川第２人骨の原人の身長が149㎝の成人男性であろうと推定された。いずれも現代人に比べるとずいぶん身長が低いのである。この２つの人骨の特徴を考えると身長が低く、ネアンデルタール人との類似点も多いが相違点もあって、はっきりどのタイプの人類であると断定できない。しかし、２つの人骨の発見された場所が更新世の新しい地層であるので、新聞発表のような原人と呼ばれるほどの古い骨ではないことは確かである。牛川人は、旧人に属する５～８万年前の人類で、今のところわが国最古のものといわれている。まさに松山校区の夜明けであり、豊橋市の曙でもある。

地質区分	年数	人類		遺跡
完新世（沖積世）				
更新世（洪積世）	1万	新人	三ヶ日・浜北人 港川人・葛生人	萩平遺跡 岩宿遺跡
	3万	旧人	クロマニヨン人 **牛川人**	野尻湖遺跡 加生沢遺跡
	15万	原人	ネアンデルタール人	馬場壇A遺跡 高森遺跡
	80万	猿人	北京原人・ジャワ原人	
鮮新世	400万		アウストラロピテクス	

人類進化の過程

牛川人骨が新聞の見出しに踊った同じ年、三ケ日町只木からも化石人骨が発見され、「三ケ日人」と名付けられた。また、同じ静岡県の浜北市も「浜北人」が発見されている。

ただ、牛川人と三ケ日人、浜北人の関係については、背が低いという点では共通しているが、牛川人から三ケ日人へとつながっているのか、彼らが狩りの獲物を追って大陸から別々に渡って来たのかなどはわからない。

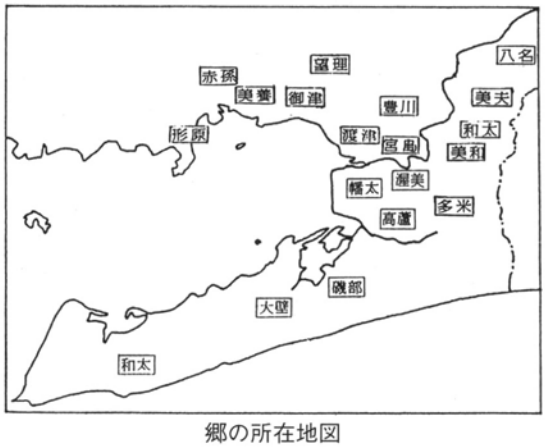
②　幡太の庄

大宝元年（701）に大宝令が施行され、地方

は７道に分けられた。伊勢湾から東は東海道とされた。そして、穂の国（東三河）は、「参河の国」となる。中央政府の出先機関である国府が、豊川市国府町に置かれた。国府は、中央から派遣された守（かみ）・介（すけ）・掾（じょう）・目（さかん）と呼ばれる四等官と、書記の役目をする史生で構成される。国司が中心となって地方の政治を担当した。

当時の国司の役割は、国民の実態把握から課税・軍事・交通・宗教・教育などあらゆる部門を含んでいたため、国府は地方における政治の中心となった。また、八幡には仏教の教えにより国家の平安を守ろうと考えた聖武天皇の詔により国分寺と国分尼寺が建てられ、三河総鎮守の宮として一の宮が本宮山頂に祭られた。

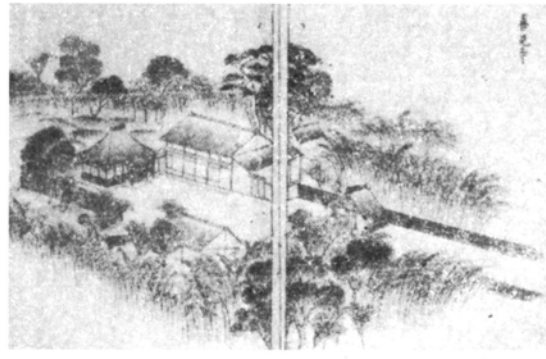
三河の国は更に３つに分けられ、新城から豊川までの中流豊川左岸を八名、西を宝飫（ほお）、豊川南岸を渥美とした。現在の豊橋の大部分は旧渥美である。その郷名は、幡太、和太、渥美、高蘆（たかあし）、磯部、大壁と記されている。幡太は、現在の豊橋市内の羽田町をあてるのと、渥美町の畠をあてるのと２説あり、渥美郡についても、現在の古名である飽海とするか、田原町とするか２説があってはっきり断定することができないが、幡太をほぼ今の羽田あたりとすると、その地域の東方を花ヶ崎といい、これは羽根井、松山校区を含む地域であった。



郷の所在地図

③　幻の喜見寺砦

南北朝（1336～92）以降、世が乱れ東三河でも国人と呼ばれる小武家がいたるところにできた。この人たちは常には農業経営者として農民を従えていた。彼らは自家の周囲に土堤をめぐらし、若党を住まわせ不時の敵の来襲に備え、ことある時は武器を取り戦った。この喜見寺砦は、古くは郷士吉見喜太郎の屋敷であったといわれている。


喜見寺砦古図

永禄７年（1564）２月、一向一揆を鎮めた家康はまたも東三河を侵攻してきた。長沢、八幡、御津佐脇砦を占領したあと小坂井で激戦を繰り返し、今川勢を吉田城に追い込んだ。この時すでに牛久保の牧野氏も、二連木の戸田氏も家康に内通していたという。そこで家康は小坂井糟塚、二連木城、喜見寺砦を足場に、完全に吉田城を包囲した。篭城すること９ヵ月、小笠原鎮実に和議を持ちかけた。力つきた鎮実は、城を開け渡して駿河に帰っていった。この時、永禄８年（1565）３月と伝えられている。

喜見寺砦も火災のため砦は焼失し、その跡地を寺としたが近年まで堀、土居の形が残っていたと記録にある。明治45年（1912）軍用道路として駅に向かう新停車場通りをつくる際この計画地の中に寺があったので、道に沿って建物、墓地を移動させた。

その後、昭和20年（1945）の戦火で焼失、以降、市の区画整理によって昔の面影がない

ほど縮小された。現在、広小路２丁目のコンチェルトタワー豊橋の真ん前に飛墓地が残っている。

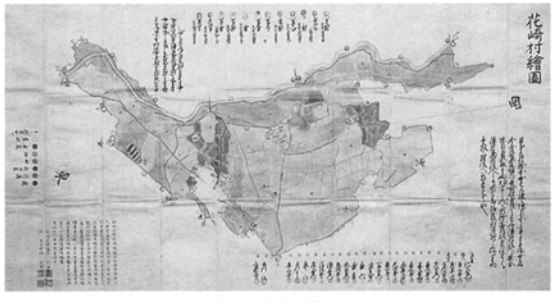
④　花ヶ崎村

平安時代以降、貴族、寺社権力の増大につれて公地公民制は崩れ、荘園が全国各地につくられていった。やがて武士が登場し、荘園の中に郷村が生まれる。「荘園資料」によると飽海庄の範囲を「吉田方、草間、仁連木、吉田、橋良、田尻、飯、飽海、小浜、小池、花ヶ崎11の汎称なり」と記されている。

松山正林寺伝によれば、同寺は弘長２年（1262）鎌倉建長寺末寺として創建されたという。このことはすでにこのあたりに集落があったことを物語っている。

豊田珍比彦の「豊橋神社誌」によると、花田の中郷神社の記述の中に「古くこの地を花ヶ崎といい鎌倉時代の開村なり」とある。

文化３年（1806）に書かれた「吉田名跡綜録」は、花ヶ崎について述べている。「この里吉田市街の南の方よりつづき、人家多し、花ヶ崎と名付けしは、西南北みな入海にしてその中にさしいでたる地故かく名付けたるなるべし・・・・」と。正林寺の前あたりはずっと西南に砂浜が続き、白砂青松、風光明媚なところであったと思われる。



花ヶ崎村絵図

中郷神社に文化11年（1814）に作られた絵図が残されている。花ヶ崎村は、現在の羽根井町付近で柳生川北部に位置していた村で、明治元年（1868）に羽田村と合併し花田村となる。明治39年（1906）には豊橋町等と合併し、豊橋市域となった。

江戸時代には、検地や領主の交替、村境の論争など、様々な目的で絵図が製作されたが、この絵図は当面の争いは無いものの、後世村境の争いが起きないようにあらかじめ近隣の村役人の確認を得て測量（縮尺は６尺を３厘、約2,000分の１）した絵図で、特異な絵図ということができる。

製作者は、吉田藩士小池是知と牟呂村庄屋牧野祐之（伝蔵）である。２人はともに吉田宿における和算の第一人者斎藤一握の門人であり、斎藤一握は和算のほか天文測量学も修めていたことから、小池、牧野両人もその心得があったものと思われる。凡例によれば赤色で道を、青で川溝、緑で田、黄で畑、オレンジで屋敷を表しており、明治以降の地形図と比較しても大きな差のない図となっている。

村は東より東郷（松山）、中郷、西郷（羽根井）と３つに分かれていて、その中でも東郷は最も広かった。東郷の集落の西側は低地が南北に続き、田が広がっていた。中郷の北側も低地で田であった。図のほぼ真中の中柴を南北に延びる大通りがある。この道は、吉田の城下から福江に至る奥郡街道で、この道に沿って人家が並んでいた。そして柳生川に架かった「ヤナ井橋」を渡り、小池村へと続いていた。花ヶ崎村は石高1,400石、江戸時代の戸数148戸、人口623人であった。

（2）近世から大正時代

①　奥郡街道

今から３百年ほど前、元禄の頃に、吉田24か町の町づくりはほぼ完成した。その頃東海道を外れ、脇街道として他地方に通ずる道路のうち、吉田を起点として南部に向かう奥郡街道（田原街道）があった。

奥郡街道は、吉田から渥美郡福江方面に行く唯一の街道であり、札木町から御輿休町、魚町、抱六町、下り町、新銭町、中柴村、花ヶ崎村を経て南下するものであった。街中へ魚と野菜を運ぶ唯一の生活道で庶民の往来は頻繁であったと伝えられている。

奥郡街道図

現在の花園町にあたる抱六町、下り町は職人の町であったが、御坊様への参詣客をあてこんで、衣料などを売る商店街に変わり、庶民の町として栄える基礎がつくられた。

中柴村は、奥郡街道の入口として江戸時代の末期には街道沿いに、煮干し屋や古着屋が町屋を連ねた。当時、魚類の売買は魚町に限られていて、その途中の中柴では魚類に入らない煮干しが売り買いされるようになった。そのほか町はずれに位置していたので、町からの帰りに買い忘れたものが買える最後の場所でもあった。

② 吉田の駒曳き銭

寛永９年（1632）三河刈谷から水野忠清が吉田に入封した。忠清は、徳川家康の生母於大の方の父水野忠政の孫にあたる。

寛永14年（1637）に幕府から寛永通宝の鋳造の命を受け、下り町の南に接する地域の白山権現社内に新銭座を設けて鋳銭を実施した。そのようなことから、やがてそのあたり（旧上り町）を新銭町と名付けたと言われている。現在、広小路３丁目の白山比咩神社の所在地である。

寛永通宝は寛永銭ともいわれ、江戸時代初期から明治初年まで通用した銅銭である。幕藩体制確立の一環として、これまで長い間使用してきた永楽通宝をはじめ、多くの中国清の銅貨に替わり、わが国で新しく鋳造された江戸時代の代表的銅貨である。鋳造所は全国に８ヶ所指定され、吉田藩もその一つであった。単位は貫・文が使用され、１枚が１文であった。この吉田の鋳銭は長くは続かず、寛永17年（1640）８月には鋳銭が中止となった。満３ヵ年という短い期間だった。

吉田の鋳銭といわれるものに「吉田駒曳」と云われる一種の絵銭がある。これには数種類の銭種があるが、表面に「吉田」の文字と「馬を曳く神官らしい人物」を描いている点は共通している。鋳銭の際、百文ごとに駒曳き銭１枚を鋳したとか、百の数取り銭ともいわれ、百徳を得られる縁起ものと喜ばれた。現在では、豊橋名産の菓子にその名と形が残されている。

吉田銭・駒曳銭

③ 首斬地蔵尊

寛文の頃、吉田上伝馬町に藤三郎という男が住んでいた。美しい女房と子供２人、むつまじく暮らすうち火事を出し、あまつさえ１

人の子供を失った。泣く泣く野辺の送りをすませ粗末な家を建てて暮らすうち、残る１人の子供も病気になって死んだ。

夫婦の嘆きは一方ならず、ことに女房は日頃信仰する潮満の観音様におすがりするほかないと心に決め、夜毎怠らず上伝馬から中柴村を経て小池村まで、約１里（３㎞余）の道のりを通って年月を経た。

ある時ふと藤三郎に疑心が生じた。若い女の身でただ１人、風雨闇夜もいとわず家を出るのは、外に男ができたからではないのかと、その夜は大そう暗かったが、藤三郎はひそかに女房のあとをつけた。

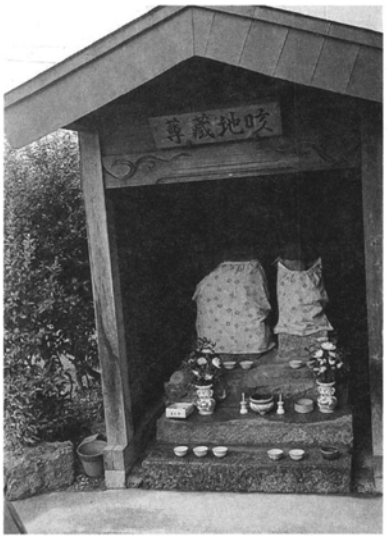
女房はいつものように潮満の観音様に参詣し、帰り道に中柴の石地蔵にお祈りした。これをすかし見た藤三郎は、暗さは暗し心の迷いもあり、さてこそ不義者見つけたとばかり走りよって切りつけた。たしかに手ごたえがあったので急いで家に帰った。

しばらくして表戸をたたく者がある。だれかと聞くと、女房の声で私ですという。先程たしかに切り殺したのにといぶかりつつ戸をあけると、女房は常のごとくうちへ入って何の変ったところもない。幽霊とも見えないので、それでは先刻斬ったのは人違いであったかと胸さわぎするのを押しかくし、さあらぬ体で今夜途中で何か怪しいことはなかったかと聞くと、潮満の観音様へ参詣した帰りに中柴のお地蔵さまへお参りした時、だれかに後から強く竹杖でたたかれ、一時気を失なったが間もなく快復し、今は以前にも増して心持ちがよくなった旨を答えた。

藤三郎は奇異の思いに打たれてありのままを女房に語り、２人で中柴へ行って見ると、もったいなやお地蔵さまの首が地上にころがって落ちていた。藤三郎ははじめてお地蔵さまが自分の疑いを晴らすため、妻の身代りになられたことを悟り、これより夫婦ともますます信仰の心を深めた。

このことが世の評判となり、男のことを石切藤三郎と呼んだという。

④　咳地蔵尊



咳地蔵

昭和７年(1932)までは、咳神様とも言われていた。

天保年間(1830～44)以前と伝えられているが、旅の坊さんが街道端の石にもたれ命がつきようとする時、「この石を祀ってくれれば、病気で難儀している者を救ってあげる」と言ったと言い伝えられている。

昔は鍛治町（旧東海道沿い）に祀られていたが、明治の終りに向山町下畑地内に移転、昭和７年信仰の人々により添仏（地蔵尊）を添える。

戦後西松山町の現在地に移転された。

⑤　参州吉田天神社

吉田はその昔、飽海郷と幡太郷の２つであって、飽海郷は大体吉田城の東一帯で、幡太郷は西南部と思われる。

江戸時代初期、幡太沖（今の吉田方）に流れ着いた木彫りの天神があまりに見事だったので、城中に祀られた。寛文４年（1664）、藩主小笠原壱岐守は、奥郡街道沿いに６百坪（1,980㎡）に近い敷地を与えて、吉田天満宮の建立を進めた。こうして造られたものが、総欅造り、くぐり戸付きの見事な門であった。

これこそ小笠原普請の代表作であった。

山門を入って石畳を進むと石の大鳥居があり、際に百度石があった。大鳥居には吉田天満宮の銅製の額がかかっており、拝殿の左右には石の座牛２頭が置かれ、本殿の左右には青銅の高麗犬が置かれていた。この本殿の中に木彫りの天神様が鎮座し、吉田藩主をはじめ、幡太郷、飽海郷の人々の崇敬を集めた。拝殿は格天井になっていて、その格間の１枚１枚に絵がはめ込まれ、崋山作の「雁」の絵もあった。　境内に向かって左手には、たくさんの朱の鳥居が並んで、その奥に稲荷社、右手は池になっていて、石橋を渡ると弁天社があった。

明治10年（1877）全国社寺改めの時、藩の庇護から離れて無格社となり、岩崎玄朔氏の管理するところとなって、社名を吉田天神社と変更した。岩崎氏の没後、新銭、花園の有志により天神講をつくり、神社の運営にあたってきた。現在は広小路３丁目の白山比咩神社に合祀されている。

赤天神由来記　吉田天神社は、天文元年（1532）より戦災焼失まで新銭町１番地に鎮座、城主の神崇厚く、時の城主小笠原壱岐守は毎日の如く城下町の見廻りと天神社参詣を行事とした。城主は好んで人目につきやすい赤毛の馬を愛用したので、いつの間にやら「赤馬の天神様、赤天神」と言い伝えられ、その名にちなんで明治42年（1909）に本殿を弁柄塗に改造した。

豊橋天神　３月の桃の節句に男の子のために飾るヒナ様に赤天神がある。これは生まれた子供が天神様のような文筆に秀でた立派な人に育つようにとの親の願いをこめてお祝いするためである。

三河地方の赤天神は、江戸末期に国府の榎本重太夫が創始者とされている。その当時は練物でつくられていたが、明治32年（1899）

豊橋赤天神

に吉田孫吉が曲尺手町に窯を築き、土雛の赤天神をつくり世に広めた。現在は、吉田孫吉の弟子西村茂治によってつくられている。

この赤天神を机の上に飾って勉強すれば、入試合格は間違いないと尊ばれている。

⑥　武徳殿

大正７年（1918）から昭和20年（1945）の戦災によって焼失するまで、この地方の剣道・柔道の殿堂として多くの若人たちが修行した武術の道場であった。

豊橋市民は、古くから武術に熱心なところがある。明治の終り頃から武道の振興と奨励を図るため、武道場建設が必要であることを訴えていた。なかでも、旭町の右武学院の創始者堀田徳次郎や松田一吉は特に熱心であった。

おりしも、大日本武徳会の総裁であった久邇宮殿下が豊橋の第15師団長であったことも建築の促進に拍車をかけた。かくして、大正７年９月に武徳殿が竣工し、翌10月開館式を挙行した。

現在、武徳殿のあった所（当時中柴町道六）には何も残っていないが、川島清五郎氏寄贈の鬼瓦２枚が豊橋市美術博物館に収蔵されている。

(3) 昭和時代（敗戦まで）

① 配給制と耐乏生活

昭和13年（1938）４月、国家総動員法が公布され同年５月から施行された。この目的は戦争遂行のため、必要に応じて国民を徴用したり、物資を徴発したりする大幅な権限を国家に与えることであった。

昭和15年（1940）、政府は米穀管理規則を定め、米の買い上げを一手に引き受けた上で国民に配給する制度を整えた。11才から60才までの男女には、１日当り２合３勺（330g）の米を配給するというものである。この配給量は、栄養補給の大部分を米に頼っていた当時の食生活からみてギリギリの線であった。

品　名	配　給　量
米	１人１日　２合３勺（330g）
味　噌	１人１か月　200匁（750g）
醤　油	１人１か月　４合（720mℓ）
生菓子	１人１か月　20銭
小児用菓子	１人１か月　30銭
豆腐・油揚	配給の都度連絡
砂　糖	１人１か月　0.5斤（300g）
マッチ	１世帯１か月　小箱10個
木　炭	１世帯１年　９俵 （３～５人世帯で20～29畳の場合）

昭和17年配給物資

昭和17年（1942）、食糧管理法が施行された。これにより、米麦のほかに雑穀・さつまいも・じゃがいも・めん類など主要食料品の大部分が国家管理のもとに置かれることになった。さらにこの年、味噌・醤油の配給制に続き、１人１年間、100点の切符の範囲内に購入を制限すると言う衣料の総合切符制が実施された。

100点で買える分量では、年間の必要量にはとても足らず、穴のあいた靴下の繕いが主婦の大事な夜なべ仕事であった。

米の不足は益々深刻になり、昭和19年(1944)以降、米の配給は１ヶ月に10日分ほどの量に減配され、不足分はいも類・豆粕などが代用食として配給されるようになった。

衣料切符

敗色濃い昭和20年(1945)には、ついに配給量は２合１勺（300g）に減配され、しかも月に数日分は欠配となった。母親達は、子供に食べさせるため、タンスから晴れ着を取り出して僅かな米やいもと物々交換をした。こうした極限状態は、敗戦後もなお続くが、当時、こんな暮らしをタケノコ生活と呼んだ。

② 市民の戦争への協力

物資の不足を耐え忍ぶ市民は、次に資金の不足についても協力を余儀なくされた。政府は莫大な戦費を調達するため、国債の消化と貯蓄の増強を国民に呼びかけた。

昭和16年（1941）以降、政府は国債消化を含めた貯蓄目標額を定めて道府県に割り当て、以下市町村へとおろしていった。昭和17年の例では、豊橋市への割当額は4,835万円であった。これは市民1人当り331円余になる。当時、国民学校教員の初任給が50円～60円であったことを考えると、割当の達成はかなりの負担であった。

昭和18年（1943）には、豊橋翼賛壮年団の呼びかけにより、軍用機の献納運動が行われた。自由意志による献金ではあったが、断ることのできる雰囲気ではなく、町内会や職場、学校を通して戦闘機10機分の86万円余が集められた。

兵器を生産するためには、原材料の鉄や銅など金属類を確保しなければならない。海外輸送路を断たれた日本は、国民が使っている

鉄・銅・アルミニウムなどの金属を回収して兵器の生産にまわす必要があった。昭和16年（1941）に出された金属回収令は、強制力を持っていた。昭和17年（1942）２月から３月にかけて豊橋全校区で一斉回収が行われ、門柱、門扉、手すり、橋の欄干、火鉢などが次々に供出された。昭和18年には、市内各寺院のつり鐘、郵便ポスト、下水のふたに至るまで姿を消した。翌年には、市民の信仰を集めていた岩屋観音像も兵器に変っていった。

昭和18年（1943）９月、政府は未婚の女性を勤労挺身隊として軍需工場へ動員する計画を立て、宣伝に努めた。これを受けて翌19年１月、豊橋でも15才以上25才未満の女性で女子勤労挺身隊が結成されて豊川海軍工廠へ向かった。彼女たちは学校単位に編成され、集団で軍需工場へ送り込まれた。その後、同年８月には女子挺身隊勤労令が出され、20才から40才までの未婚女性は強制的に動員されることになった。

③　戦時教育と学徒動員

昭和16年４月、戦時体制に即応する教育改革の一環として国民学校が発足した。そのねらいは皇国民の練成、つまり、天皇に対する絶対の忠誠心の植え付けと、アジア諸国民のリーダーとしてふさわしい国民の育成にあった。教科書の改訂も行われた。なかでも皇室中心の歴史教育、武道と体操をあわせた体錬科は特に重視され、国民学校教育の中核となった。

さらに、昭和18年１月には中学校令が公布された。これは公私立の中学校・高等女学校・実業学校の教育を時局の進展に合わせ、先の国民学校令の延長線上におく教育改革であった。

こうした制度改革とともに、生徒たちは国防組織の一端に組み込まれていった。昭和18年４月、戦時学徒特別錬成の一環として幹部生徒の練成講習会が県下６会場で行われた。豊橋では豊橋中学校を会場に豊橋中学校、豊橋第２中学校、豊橋商業学校を含めた東三河の７校が銃剣や木銃を持って参加した。

一方、生徒たちを総力戦の一員として労働力の供給源とする動きも急であった。太平洋戦争に突入後は、学校報国隊の組織を通じ授業を停止してまで農村の応援に出かけた。

昭和19年（1944）３月、愛知県学徒動員実施要綱を発表し、県内の各大学・高等専門学校・中等学校に通達した。市内で動員対象となったのは、３年生以上の各中等学校の生徒たちである。この動員は、これまでと違って学校の授業は全く行われず、一般工員に混じり年間を通じて兵器の生産に携わる勤労作業通年動員であった。同年４月、生徒たちは学校、学年、その他の様々な単位で市内外の軍需工場に配置された。なかには、遠く名古屋、半田の工場に割り当てられ、教師の引率・監督のもとに家庭を離れて働く生徒たちさえいた。同年９月、第２次動員が学校に残っていた各校１・２年生に対して発令された。動員されたのは、中等学校の生徒だけではなかった。昭和19年以降、国民学校の高等科児童に対する動員も頻繁に行われた。動員先や作業内容、動員の時期や期間は各校まちまちであるが、食料増産、開墾、兵器生産、飛行場建設等の土木作業など多方面にわたっている。

昭和20年（1945）３月、全国の学徒動員数は、中等学校162万人、国民学校58万７千人に達した。

動員をうけた学徒も空爆により、ある者は機銃掃射を受け、また、ある者は病魔に冒され尊い生命を奪われる。これが戦争というものか悲しい。

13才で戦死した女生徒の日記がある。昭和20年４月16日から６月19日までの記事が記さ

れている血染めの日記帳である。女生徒は、狭間国民学校を卒業し豊橋高女の１年生であった昭和19年（1944）10月に豊川海軍工廠に動員され、女工部第２装填工場に配属された。防空壕の中で遺体として発見され、所持していた救急袋の中にあった定期券入れ、日記帳、履いていた下駄などが家族に渡された。

『４月22日、お昼に空襲警報が発令された。みんな壕に入った。しんみりとして、何だか今にも死ぬような気がした。死ぬ時は、皆一緒だ。「今日よりは省みなくて大君の醜の御楯と出で立つ我は」この気で私たちは入廠したのだ。何で死ぬのなんか惜しまう。私達でも生産陣の特攻隊だ。

４月29日、天皇の生まれ給ひしこの良き日我等学徒は職場にて寿ぐ、生まれて初めて天長の佳節を職場で迎えた。これも勝つ為だ。

５月19日、今日はじめて爆弾の落ちる音を経験した。ザーっと云うが早いかドドーンバン、ドドーンバンとすごい音だ。こんな音を掩蓋のない防空壕でブルブル震えながら聞いた。今爆弾の為に死ぬのはいやだ。勝利の日を見なくて。

６月14日、姉のお古の作業衣を着て出勤した。作業衣の方が働きやすかった。着心地も良い。私達もふさわしい服装ができて嬉しい。いよいよ本土決戦だ。』

―淑子の日記、13才の女生徒は戦死した―

東京新聞出版局　　より

（追記）豊川海軍工廠の被爆

昭和20年（1945）８月７日、海軍最大の兵器工場「豊川海軍工廠」が爆撃された。

マリアナ基地を出発したＢ29爆撃機124機、硫黄島基地からそれを護衛するＰ51戦闘機45機は、名古屋方面へ向かうと思わせて知多半島にさしかかった時、機種を突如豊川へ向けた。午前10時13分、Ｂ29の12波による波状攻撃と護衛するＰ51の機銃掃射が開始された。約30分の間に、彼らの頭上には500ポンド（約250kg）爆弾3,256発が降り注いだ。

この爆撃により、豊川海軍工廠は徹底的に破壊され、死者2,500人余りとその数倍を超す重軽傷者を出した。

死者の中には、多くの女子挺身隊員と464人の動員学徒が含まれている。その中には、54人の国民学校児童もいた。終戦を１週間後に控えているというのに、多くの命が奪われたのである。

血染の日記帳

④　豊橋空襲

昭和19年11月、サイパン基地を発進した米軍爆撃機Ｂ29が東京に初めて姿を見せた。同年11月23日には伊勢湾沿岸に接近したＢ29に対し、豊橋にも空襲警報が発令された。大都市を中心とした空襲は、やがて地方の中小都市へと変更され、その２回目の目標となったのが豊橋・静岡・福岡市だった。

木と紙の家が密集する日本では、空襲に備えて建物疎開の必要性は早くから叫ばれていたが、県が軍の要望を受けて豊橋の疎開計画を立てたのは昭和20年の初めであった。駅前～守下町、関屋町～上伝間町～駅前大通り、西八町～神明町と三筋の空き地をつくる計画を基に、約10万㎡の土地強制買収と家屋の取り壊しにかかったのが同年５月であった。し

かし、米軍の爆撃は急で、取り壊した家屋のかたづけが済まないうちに運命の日がやってきた。

昭和20年（1945）６月18日の夜中、隣の浜松が空襲を受けて燃え上がった。その２時間後、四日市市が焼き払われた。今度は豊橋の番だと市民は予感したという。

豊橋の大空襲

６月20日に日が替わった夜半、突然空襲警報を告げるサイレンで飛び起きた。ラジオは、東海軍管区の情報を繰り返していたが、その時すでに、柳生運河方面と太陽航空（現イトーヨーカドー）から火の手が上がっていた。それから２時間余の波状攻撃で136機のＢ29は、逃げ惑う市民の頭上に焼夷弾の雨を降らせた。アメリカ軍の作戦任務報告書によると、空襲は６月20日の午前０時58分から３時17分までの２時間余りの空襲だった。そして、午前３時15分Ｂ29は去っていった。

これまで市民の義務として早くから訓練を重ねてきた防空演習は、実際の場面では何の役にも立たず、市民は逃げ延びるのに精一杯であった。そんな市民に対して、超低空飛行で飛ぶＢ29は、燃え盛る炎に赤く染まった不気味な機体を浮かび上がらせながら機銃掃射を加えた。

夜明けまでに焼けるものはほとんど焼け落ち、市街地は焦土と化した。全焼、全壊家屋は全戸数の70％、死者624人、重軽傷者346人、被災人口は全市民の50％に及んだ。悪夢の一夜であったが、焼け出され、すべてを失った市民にとっての苦労はむしろそれからであった。

罹　災

事実、恐れていた事態が生じた。空襲後１週間余りを経て、新川国民学校に収容されていた被災市民の中から赤痢患者がでた。真夏、水道も復旧しない状態で疲れ切った市民に抵抗力はなかった。医薬品や人手の不足もあって、赤痢はまたたくまに全市に広がり、空襲を免れたわずかな病院では収容しきれなかった。市はやむを得ず新川国民学校を臨時の病舎にあてた。患者は７月に554人、８月に758人と増え続け、ようやく下火になったのは10月に入ってからであった。

⑤　本土決戦

最後の抵抗線であった沖縄も豊橋の焼けた翌日に連合軍の手におち、戦局は最終段階を迎えた。すでに、軍と政府は「１億玉砕」の掛け声のもとに本土決戦の態勢に入っており、着々とその準備を進めていた。

昭和20年６月、義勇兵役法の実施により豊橋でも国民義勇隊が結成された。このころ、Ｂ29は空から軍部の批判や自由主義をうたうビラを盛んに撒き、日本国民の反戦、厭戦気分を誘っていた。それを拾った市民は額面どおりには受け取らなかったものの、追い詰められ、本土決戦が差し迫った気配を感じ取り、最悪の事態を覚悟した。

⑥　敗　戦

すべてが破局に向かう中の8月6日、広島に原爆が投下された。続いて9日には長崎へ。その前日ソ連が参戦した。戦うすべを失った日本はポツダム宣言を受諾し、連合軍に無条件降伏した。

昭和20年8月15日の正午、全国民は昭和天皇の玉音放送を通して日本の敗北を知った。はじめ、誰もが半信半疑で事態がのみ込めなかったが、降伏の事実がはっきりしてくると、悔し涙を流す者もあれば、徹底抗戦を叫ぶ者もあった。しかし、大方の市民は戦争が終わった安心感と、先行きの不安感が交錯する複雑な気持ちを整理することに手一杯であった。今の若者が考えているほど戦争ははなやかなものではない。戦争とは言語を封じられるものであり、耐え忍ぶものであり、あらゆる自由を取り上げられるものであることを分かってもらいたい。

敗戦という厳しい現実を思い知らされるのはもう少し先のことであるにしろ、強い陽射しを受けて白く乾いた真夏の昼下がり、市民の張りつめた気持ちは次第に緩んでいった。

⑦　敗戦から戦後へ

昭和時代の戦争の発端は、昭和6年（1931）9月、中国東北部の柳条溝で深夜、日本軍が鉄道を爆破し、それを中国軍によるものとして日本軍が中国軍の兵営を攻撃したことから始まる「満州事変」である。以後、中国での戦火は拡大され、さらに、昭和16年（1941）ハワイの真珠湾にまで戦場を拡げた結果の敗戦であった。日本は15年間にわたり戦争を続けたが、この戦争の悲惨さは、死者の数だけを見てもいかなるものかが推察できる。敗戦の年の日本の人口は、7,200万人余だが、この戦争で軍人、軍属、一般市民を含め310万人余の戦死者を出した。一方、日本軍は中国で1,000万人余、インドネシアで400万人、ベトナムで200万人、フィリピンで110万人などアジア全体では、2,000万人以上の人命を奪った。

この悲惨な戦争の終結をきっかけとして、日本は大きく変化した。まず、昭和21年（1946）に制定された憲法によって日本は戦争を放棄し、戦争をしないことを世界に明言した。また、同じく憲法で、「主権は国民にあり、天皇は国政についての権能を持たない象徴」とされた。明治憲法では天皇に主権があり、国民は天皇の臣民（家来）であった。国民にとって天皇は「生きている神様」であり、戦時中の国民（小）学校や中学校では、生徒が校門に出入りする時、天皇の写真を納めた建物（奉安殿）に向かって敬礼したり、始業前の朝礼では東京の宮城に向かって最敬礼が行なわれた。学校では「皇国の臣民」としての教育が行なわれたのである。軍隊では、「上官の命令は天皇の命令」だとして、絶対服従が義務づけられ、天皇の命令として兵士は戦場に送られた。

戦後の憲法で、主権は国民に移り、男女の別なく主権者として参政権を持つことになった。教育も「個人の尊厳を重んじ、真理と平和を希望する人間の育成を目標にした教育基本法が昭和22年（1947）に公布された。

さらに、憲法で労働者の団結権、団体交渉権などの権利が定められたうえ、労働基準法等の労働法制が整備された。また、農地改革によって、一定の条件の下で地主の小作地は、小作農に売り渡されて多数の自作農が形成され、地主制は解体された。

戦前、劣悪な労働条件や生産条件の下にあった国民の多数を占める労働者と農民は貧しい生活を余儀なくされたため、国内市場は小さく、海外市場が要求された。そこから海外への開拓農民の送り出し、あるいは海外投資、さらに資源の確保のための侵略的対外進出が

行なわれた。

戦後の労働改革、農地改革は、憲法の生存権の保障とともに、劣悪な労働条件、生産条件を改善し、労働者や農民の生活条件を向上させる出発点となった。これを起点とした国内市場の拡大は、工業生産の拡大、商品流通の増大となり、商店市街地の活況を呼び起こしていった。

⑧　闇市の出現

終戦を告げる玉音放送で戦後が始まった。敗戦の衝撃に打ちひしがれ、飢えと失望からの出発であった。

豊橋市の配給量は1,400Cal台まで低下し、市民が焼け跡で聞いた平和国家への道は深刻な飢餓からの脱出が重要な鍵を握っていた。このような供給と需要の極度なアンバランスから、市民の生活を脅かす悪性インフレーションが発生し、その結果生み出されたのが闇市である。

豊橋では昭和20年10月頃から、駅前通りにバラックやヨシズ張りの仮店舗、露天市場などを中心とした闇市が出現した。いもあめ、みかん、たばこ、包丁など生活物資が売買されていた。ここでの闇価格は、昭和17年に制定された統制価格と比べると、砂糖は500倍、米は120倍、石鹸は100倍の値段で取引されていた。それでも人々は生き抜くために駅前闇市へと足を向けた。

闇市の神明町への移転は順調に進み、12月16日に移転を完了した。名前も「青空市場」「明朗市場」と呼び健全なイメージを市民に与えたが、その実態は必ずしも名前のとおりではなかった。

その後、豊橋の戦後復興計画が軌道に乗り始め、神明町の青空市場の敷地は、市内第1号の市街地公園に変身することとなった。そのため露天商たちは、市の斡旋により竜拈寺境内と牟呂用水上の大豊百貨店、それに接続する個人の店舗に移り住んだ。100世帯を超える移転は昭和25年（1950）に完了、混乱の時代の市民生活を支えた闇市は幕を降ろしたのである。

（4）復興の槌音

駅前から着手された都市復興計画は、道路の整備から始まった。豊橋駅を中心に環状と放射状の道路を整備し、公園や学校などを配備する計画を立てた。魚町と広小路の道路整備は昭和25年に完成し、魚町には魚商人が、広小路には衣類、食品、娯楽機関が軒を連ねた。この２つの町に続いて、２つの町を結ぶ花園町が復興し、駅前を中心とした都心部の体裁が整った。

①　駅前大通り

太平洋戦争が激烈を極める昭和19年（1944）、家屋の密集する駅前周辺を焼夷攻撃からの被害を最小限に食い止めるため、また、本土決戦に備え大量の軍隊の移動や重量車両の運行をスムーズにするため、そして、緊急時には小型飛行機が発着できるように計画を立て、まず駅正面から神明町の方向に50ｍ幅の軍用道路が建設されることになった。

この計画に入った地域の住民数百世帯は、強制的に立ち退きを強いられた。縁故を頼って豊川市、新城市、一宮村、石巻村などへ疎開して行く者、市からの代替地として与えられた小池、東田、向山、下地方面に行く者など様々であった。戦時下とはいえ、数多くの人達が大変な苦労をされたのである。

今は街路樹が植えられ、スズラン灯が点灯し、市内電車が複線で走り、大型店舗も数多く進出し面目を一新した駅前大通だが、この発展も偏えに犠牲を強いられた方々の礎の上につくられた新しい駅前大通りであることを

我々は忘れてはならない。

水上ビル　明治38年（1905）に通水した牟呂用水路は、新城市一鍬田で取水してから豊川左岸の台地を流れ、やがて豊橋の市街地を二分した後、牟呂、神野新田1千百町歩（1,090ha）を潤している全長24.6㎞にわたる用水路である。

街の中を流れる新川は、満々と水を湛え、両側には柳が立並び、その木の下にはメダカが群がり、夏は涼しく爽やかで風情があった。沿道の住民にとっては格好の洗濯場として利用され、時には子供たちの水遊び場ともなった。小田原町には何軒ものうなぎ屋があって、うなぎがいっぱい入った大きなビクを幾重にも積んで新川の水の中で飼い、注文に応じて豊橋駅から全国へ貨車で発送していた。

水上ビル

昭和24年（1949）12月31日に廃校となった狭間小学校の跡地に建てられた大豊商店街が、名豊ビル・バスターミナル建設のため昭和45年（1970）に移転することになった。その移転先として牟呂用水路の上に全国でも珍しい88軒の店舗兼住宅のビル街が東西1㎞に亘り建てられ、1階には店舗や事務所が入り、上の階は住居になっている。玩具屋、駄菓子、雑貨の問屋、飲食店などが軒を連ねている。そして、「水上ビル」と謳われ、市の内外から絶賛されたのである。住まいの床下を川が流れるという画期的な建築様式の町並みになっている。

歩道橋の建設と撤去　昭和42年（1967）、学童の通学路として、また一般市民を交通事故から守る目的で駅前大通りに歩道橋が建設された。この年、校区内では3月に東小田原歩道橋が、10月に中柴歩道橋がそれぞれ建設された。

しかし、時移り諸般の情勢も変化し、駅前大通りの歩道橋を撤去するという案が持ち上がった。撤去派の言い分は、子供の数が激減していること、歩道橋が老朽化したこと、更には歩道橋が駅ペデストリアンデッキからの景観を阻害していることなどを理由としてあげている。一方、温存派は、例え子供が1人になろうとも子供を交通事故から守ってくれるのが歩道橋を建設した精神であり、これは一歩たりとも譲れないとの意見であった。

結局、子供の登下校時には専任の交通指導員をつけること、また、地域からも立ち番をお願いして万全を期すということで合意が成立、平成16年（2004）8月に撤去された。撤去後は、その地に市内電車の停留所が設けられ「駅前大通り停留所」と命名され、平成17年（2005）3月31日に開設された。

② 広小路通り（新停車場通り）

「広小路」は、昭和の始め頃からそのように呼ばれていたと思う。しかし、それは「呼び名」であり、実際には昭和30年（1955）戦災都市復興計画の完了によって正式に「広小路1丁目」、「広小路2丁目」、「広小路3丁目」が戸籍地番となった。

明治21年（1888）東海道線の開通とともに羽田村に豊橋停車場ができた。駅に通ずる幹線道路として最初にできたのが「停車場通り（後の常盤通り）」、続いて明治末期、陸軍第15師団の設置に伴い軍用道路としてできたのが「新停車場通り」である。

駅前には旅館街が立並び、大正末期には広小路通りを市内電車が走り、昭和７年(1932)には豊橋で初めての百貨店「丸物」が開店するなど、豊橋の玄関口としての様相を整えた。

昭和20年６月の戦火により都心部の殆どが灰燼と帰したが、先輩諸氏の努力により焦土の中から意外と早く春が巡ってきた。昭和28年（1953）には、広小路通り東西の入口に大きなネオンアーチが完成し、昭和50年（1975）代に入ると郊外型の大型店の進出等により都心での地盤沈下が顕著になった。このことに対応するため再開発の機運が高まり、都心居住を含めた再開発の狼煙が広小路３丁目Ｂ地区からあがった。

新停車場通り　陸軍第15師団の設置は、豊橋にもう一つの繁華街をつくった。青春の息吹を感じさせる賑わいである。神明町から西に向かい豊橋駅に至る新しい幹線道路で幅員は12ｍ、別名凱旋道路とも呼ばれ出征、凱旋の兵士の見送り出迎えの道路でもあった。

大野銀行

大野銀行

大野銀行、正式には大野銀行豊橋支店と言い、明治32年（1899）５月開行した。当時は“とよばし”に近い船町にあった。

第15師団の設置に伴い花田町西宿に移転した。市民のアイドル的存在で往来者のランドマークとされた。昭和20年の戦災により焼失、同年９月東海銀行に合併した。

豊橋最初の百貨店「丸物」

新停車場通り

昭和７年広小路通りに開業、当時は居ながらにして何でも揃い、そのうえ、流行の先端のものが見られるとあって見物がてらの買い物客で賑わっていたという。この丸物の進出で神明町界隈は往年の本町、札木の賑わいを奪ってしまい豊橋の銀座通りと呼ぶ人もあった。

出陣する歩兵第18聯隊

出陣する歩兵第18聯隊

明治17年（1884）に創立、訓練に訓練を重ねた精鋭部隊で、日清・日露戦争、昭和３年(1928)には、済南事件で山東半島に出兵、昭和９年（1934）には、満州事変のさなかソ満国境警備に動員され、さらに昭和12年（1937）８月には盧溝橋事件に端を発した日支事変勃発による中国大陸出兵と５度母国をあとにしている。

出身者が三河、遠江、駿河、伊豆の４カ国の若者で編成されている部隊だけに見送りが多く、駅へ向かう広小路通りは手に手に日の丸の小旗を打ち振る人、人、人の波で埋め尽くされた。

小旗を打ち振り威勢のよい見送りや出迎えばかりではなかった。お国のためとはいえ遺骨となって無言の凱旋をされる勇士、戦い半ばで病を得、また、敵の矢弾に倒れた傷病兵の淋しい出迎えもあった。

駅前旅館街

駅前旅館街

第15師団の兵士は、三河のほか遠江、駿河出身の若者が中心であったため、師団兵士の面会には両日を要した。その面会家族らのため、豊橋駅前に７軒程の旅館が競って建ち、土産物店がその間隙を縫い豊橋の名物を店頭に並べていた。

蝶春座

蝶春座

明治44年（1911）10月、新停車場通りの清水町に設立された定員582名というこじんまりした寄席で、市民から「寿座」と呼ばれ親しまれていた。寿座を蝶春座に改称したのは、大正13年（1924）２月、３代目の経営者八木儀三郎の時である。なお、創立者は、松山の牧野米作であった。

広小路通り

昭和28年完成のネオンアーチ

昭和28年（1953）に「広小路発展会協同組合」が設立され、東西の入口に大きなネオンアーチが完成した。街を明るくしようと各丁目ごとに発展会が組織され、スズラン灯に続いて「広小路」の文字が浮き出される街路灯がお目見えした。

豊橋まつり

豊橋まつり総おどり

昭和28年、豊橋中心部の商店街で「商工祭」と銘打って、大々的に売り出しを開催した。これが豊橋まつりのはしりである。

翌29年（1954）に始まった豊橋まつりのメインイベント「市民総踊り」が広小路通りで行なわれた。当初は、３千人位の参加者であったが、年々増え続け１万人を超す勢いとな

ったため、会場を平成９年（1997）より駅前大通りへ移して行なわれるようになった。

歩行者天国　昭和45年（1970）８月23日、名古屋、金沢についで豊橋でも広小路通りで歩行者天国が正午から始まった。「車のない町、のびのびと」、また「車道に飛び出す人人人」などと賑々しく報道された。

大型店舗の進出　昭和62年（1987）頃、豊橋駅前には丸栄（昭和49年進出）、豊橋西武（昭和46年丸物と提携、平成15年撤退）、ダイエー（昭和47年進出、平成10年撤退）などの大型店舗が建ち並び、大都市なみの景観を呈していた。

駅を中心に人の往来が激しくなり、お客様はここで買物を済ませ、そそくさと汽車に乗って帰っていった。こうした大店舗の駅前集中による営業立地の悪化現象をまともに受けたのが広小路３丁目と花園商店街である。

昭和47年（1972）９月、流通業界大手のダイエーが地権者らの誘致に応じて広小路に進出した。鳴り物入りの進出で、開店時には数万人が来店するほどの集客力をみせ、名豊ビルのオープンなどで駅前大通り商店街に押されていた広小路通りの人の流れを変えた。

ダイエー

昭和50年代に入り、本格的な郊外出店時代を迎えダイエーも苦戦を強いられ、対抗策として閉店時間の延長、リフレッシュ等を試みたが抜本的な打開策にはならず、ついに平成10年（1998）５月31日をもって閉店撤退となった。

大手スーパーが都心に出現するということは、センセーショナルなことであり、広小路通りに活気を呼び戻すには格好な材料であったが、反面それによって広小路通りから姿を消してしまった商店が数多くあったことも忘れてはならない。ダイエーが撤退した今、去って行った商店が戻って来るかといえば、決してもう甦ってはこないだろう。これも、広小路にとっての歴史の一頁である。

21世紀へ向かっての街づくり

広小路ルネッサンス計画　昭和63年（1988）、広小路の再生に向けて、豊橋広小路発展会協同組合（高津政義理事長）によって取りまとめられたもので、広小路通りの配電線地中化工事を千載一隅のチャンスとして捉え、セミ、エンクローズモールを整備することを提案したものである。平成元年（1989）から３年、広小路商店街主導で総事業費４億５千万円かけて実現された。広小路商店街店主達の心意気を示した一大整備事業であった。当計画は「中域型商店街から広域中心型商店街へ成長」していくことを目標に

・行きやすい街づくり
・楽しく歩ける街づくり
・魅力ある美しい商店街
・文化色豊かな街づくり
・住める街づくり

の５項目を基本フレームとして、道路改良、街路樹植栽、歩道のカラー舗装、７つの出会い像などを整備した。

街路樹植栽　柳から桜に変更した。また、ルネッサンス事業記念として桜を５本植え商店街の春の訪れの象徴とした。

歩道カラー舗装化　天然の御影石を総延長1,200ｍ、7,000㎡敷き詰め、日本一の長さを誇っている。

7つの出会いの像　七福神を題材として、西洋と東洋の架空の有名人が広小路で出会うという設定で、地元松山校区出身の漫画家牧野圭一氏に依頼制作した。

・善意の出合い（大黒天とサンタ）が善意の袋を持っての出合い
・美の出合い（弁財天とミロのビーナス）東洋と西洋の美人の出合い
・富の出合い（恵比寿と大公望）大きな魚は海の恵み
・勇気の出合い（毘沙門天と騎士）騎士と守護神
・長寿の出合い（寿老人と歩く木）樹齢4000年の木の前では、百歳の人間も小さく見える。
・英知の出合い（福禄寿と宇宙人）宇宙人と頭脳の出合い
・ユーモアの出合い（布袋と鯨と小便小僧）小便小僧と小鬼と河童の「連れション」

7つの出合い像と共に河童の像が広小路3丁目タカツ前のカスケードに“人魚と河童の像”がある。また、飛騨国際工芸学園の生徒が作った顔の表情7態の巨木彫刻7基もある。出合い像、カスケード、巨木彫刻を見ていただければ幸いに思う。

牧野圭一氏の略歴　地元豊橋松山校区出身の漫画家、昭和12年生れ、時習館8回卒、15年間読売新聞政治漫画を執筆、平成13年日本マンガ学会創設に参画、事務局長、現在は京都清華大学美術学部マンガ学科の教授であり、豊橋ふるさと大使でもある。

広小路三丁目地区市街地総合再生基本計画調査　平成8年(1996)、当基本計画調査（委員長豊橋技術科学大学助教授大貝彰）は、「商店街の本来の姿は生活する場所である」ことを思い起し、カルチャー、アミューズメント、メディカルなどの生活支援施設を配置することにより、広小路三丁目地区を生活空間として捉え、さらに現在話題となっている「都心居住」に触れ、当地区での必要性と可能性が検討されたものである。

2　松山校区の産業

(1) 経済的中心地としての校区の現状と課題

① 松山校区の経済的役割

松山校区には様々な業種の事業所が多数設置されている。平成13年（2001）には、1,711事業所があり、市内全事業所の10%を占めている。市内51校区の中で1,000を超える事業所があるのは松山校区だけである。

面積に対する事業所立地密度も、1㎢あたり1,543事業所があり、2位以下の校区を大きく引き離している。こうして見ると松山校区は、事業所数が多いだけでなく、その集中度も高く、豊橋市の経済活動の中心的な役割を果たしている。

松山校区の事業所を業種別に見ると、「卸・小売業、飲食業」、「サービス業」、「金融・保険業」の順になっている。これを市内全体の事業所数と対比して見ると「金融・保険業」が24.3%、「卸・小売業、飲食業」が13.9%と高い比率を示しているが、「製造業」2.4%、「建設業」2.9%、と比率は極めて低い。つまり、松山校区は市の経済活動の中心的存在ではあるが、卸・小売業、金融業、サービス業など流通経済分野の事業所が集中している地域であると言える。

② 中心地域経済の空洞化

松山校区総ての産業分野の経済活動が大きな困難に直面している。昭和50年代に増加傾向にあった事業所数も平成に入ると減少に転じた。昭和50年以前に開設された事業所は、平成3年から平成13年の10年間に40%余りが

無くなっている。昭和60年以降では、５年後にはその３分の１が姿を消している。

この経営の不安定性を校区の代表的産業である商業の事業所数について見ると、平成３年から平成14年の間に卸売業60%、小売業78%、卸と小売の合計で75%の事業所が生き残れたに過ぎない。そして、松山校区の事業所残存率は、市全体と比べると何れも小さい。また、同じ期間の商品販売額の推移では、卸売業だけでは５分の１近くに落ち込み、小売業でも半数近くまで減っている。これに対し、市全体の販売額の減少は松山校区よりはるかに小さい。

ここで注意したいのは、経済活動の低迷が、人口が増加している中で生じていることである。消費者の数が増えているのに商品販売額が大幅に減っているということは、市民の消費水準が低下していると言うこと、つまり市民の収入が減っているということに他ならない。

③　市街地の姿の変化

市の中心市街地に「空洞化」現象が起きるようになった遠因は、日本経済の高度成長の過程の中にある。急速な工業生産の発展は、商品の大量供給を可能にした。農業においても同じことが言える。

市民の生活様式も変化した。釜やかまどが電気炊飯器に、たらいと洗濯板が電気洗濯機に、汲み取り便所が水洗トイレに、和室が洋室応接間に等々・・こうして畳屋、桶屋、建具屋などの職人の仕事が奪われていった。

中心商店街では、木造家屋が建ち並ぶ商店街から鉄筋コンクリート製の高層建物が連なる商店街へと変貌した。丸物百貨店は、規模を大きくして駅前へ移転し、丸栄百貨店が駅前大道に進出してきた。

大量生産を背景に、大量商品を取り扱って薄利多売の「流通革命」を目指すスーパーマーケットは、「ほていや」、「購買」、「岡田屋」などの商店名で、花園町、広小路、ときわ通りに姿を現した。ダイエーが広小路に進出する頃には、市街地の様子が次第に変わっていく。それまでの百貨店の取扱商品は、高級品、個人経営の商店は普及品を販売するという形で共存しながら店舗が建ち並んでいた。しかし、市民生活の様式の変化やスーパーマーケットの市街地への進出は、職人の作業店舗の閉鎖や、八百屋、魚屋、日用雑貨等を扱う個人商店の廃業を生み出した。かつては、駅前の中心商店街から離れていても、専門店や個人商店が軒を連ねていた町並みがあったが、扉を閉ざした住宅が数多く現れたことにより町並みとは言えない通りに変わってしまった。

市街地の空洞化は、郊外の人口増加と同時進行していた。郊外への人口拡散を促進したのが自動車の普及である。商品の大量生産方式の確立は、道路整備とトラックによる大量輸送を促進し、スーパーマーケットへの大量商品取引を可能にした。その後、スーパーマーケット同士の競争が激化するにつれ、駐車場を持たない店は郊外に移転していった。

商品の大量取引に基づいた薄利多売方式により広汎な消費者を引寄せたスーパーマーケットは、全国にチェーン店を展開した。

スーパーダイエーは、開店15周年目の昭和47年(1972)、三越百貨店を抜いて小売業売上高で最高額を記録した。そして、ダイエーの後に続いたスーパーマーケットは、総合スーパーだけでなく、食品、衣料品、薬品、電気器具等々の専門スーパーも現われた。

その後、百貨店は総合スーパーに追い上げられ、総合スーパーは専門スーパーに追い上げられる等、大型店の出店競争と生存競争は激しさを増し、そのあおりを小規模スーパーや個人経営の商店がまともに受けたのである。

昭和56年、政府は大型店の出店規制強化の通達を出したが、昭和60年、日米貿易委員会で「大規模小売店舗法」が米国製品の輸入を阻止する要因だと指摘されて以降、大型店出店規制が緩和され始めた。しかも、平成2年(1990)の日米構造協議によって規制はさらに緩められた。法の「適用適正化」が実施された。これ以後、外国資本の小売企業が国内各地に店舗展開することになり、平成3年に日本へ進出した「トイザラス」は、わずか5年で日本における玩具小売業のトップの座を占めることになった。

平成12年（2000）に「大規模小売店舗法」が廃止となり、それに替わって「大規模小売店舗立地法」が制定された。この新法制定と同時に「中心市街地活性化法」と「改正都市計画法」が制定され、これらを併せて「まちづくり三法」と呼ばれているが、それぞれがバラバラに運用される訳だから、統一的な計画に基づいた整合性のある「まちづくり」は不可能である。そして、大型店の進出も退出も適切に対処できる法的規制は存在しないのである。

松山校区内への「ユニクロ」と「栄電社」などの出店だけでなく、校区外にも大型店の出店が続くなか、コンビニエンス・ストアも市街地を中心に急速に増えだした。

「コンビニ」は、店舗を直接運営する個人経営者の背後に巨大商業資本が控えており、その巨大商社が個々の店舗との間で、パソコン等の新たな通信手段を駆使して、「売れる商品」・「売れない商品」・「よく売れる店」・「売れない店」などを常に把握して、売れ筋商品を適切に補充している。しかも、24時間営業である。消費者にとっては、いつでも利用できる便利な店ということで、利用も多く、出店が相次いでいる。

百貨店、スーパーマーケット、コンビニエンス・ストアなど小売業の「強者」間で激しい競争が展開される過程で、多くの小規模商店が相次いで店舗閉鎖を余儀なくされただけでなく、大型店やコンビニの過度の出店・乱立は、小売業の「強者」の存在そのものの危機を招いた。

ダイエーも西武百貨店も破綻し、撤退を余儀なくされた。さらに、松葉町にあった市民病院の郊外移転も加わって、市街地の「空洞化」は一層進んだ。

市街地が空洞化するということは、街の中にいて買物に不便を感じるということであり、街の中から郊外に買物に出かけなければならないということである。市街地の姿は大きな変化を遂げたのである。

④　当面する課題

昭和30年頃までの松山校区の市街地では、比較的狭い範囲での地域完結的な生活圏が形成されていた。物づくり職人と物売り商人とが混在し、生活に必要なものは自分の家の周りの商店で大体買うことができ、買った店で修理してもらえる。しかし、今では小規模な生産、販売による完結型の地域経済は成り立たなくなった。

大量生産、大量輸送、大量販売の体制の成立は、巨大資本の主導の下で行なわれ、しかも、国境を越える場合がしばしばある。衣料品の多くは、中国製であり、食糧は米国産である。テレビやカメラ等も国外で生産されたものが国内メーカーのブランドで販売されている。だから修理するより買った方が安い場合が数多くある。修理すれば使えるのに、修理せずにゴミとして棄てられる。環境汚染、地球の破壊が進んでいく。巨大店舗の進出によって、従来の街並みが破壊され、巨大店舗間での競争の結果、敗れた店舗の退出によって商店街の空洞化が生れる。要するに儲かる

ところには出て行くが、儲からなくなれば撤退する巨大資本の行動を自由に放任しているのが規制緩和である。

空洞化した街並みをどのように再建するかが松山校区の当面の大きな課題であり、巨大商業店舗の出店や退去については、豊橋まちづくりビジョンに合致する限りにおいて許可することができる法的整備を行政に要請することがまず必要であろう。

広小路通りでは、道路改良などハード面の取組みだけでなく、ソフト面でも「スロータウン・フェスティバル」のような催しが試みられている。こうした地域商店街の運動の輪をさらに拡げ、その運動内容を実りあるものに育てていくことが緊急課題として求められている。今、ファースト・フードに対するスロー・フードの運動が世界各地で展開されている。スロー・フード運動とは、「その土地で獲れたものをその地域の人達で食べよう」という、いわゆる地産地消の運動である。このような運動の例としては、平成15年（2003）に発足した「穂の国ブランド研究会」がスロー・ライフとスロー・フードの運動として行なっている。

平成17年（2005）12月に発足した食品会社「ＴＭＬとよはし」は東三河地域産業の野菜、魚、肉等を早稲田大学の研究室が開発した新技術「低温スチーム加工」によって処理し、「栄養素や風味、香り等が損なわれず」、「調理で非常に使い勝手が良い」食材を作ることに成功し、それを事業化しようとしている。この事業は、㈱北海屋、とよはし種苗㈱、㈱大三コーポレーションなど松山校区の企業を含めた市内の企業が早稲田大学や豊橋技術科学大学と結んだ産学連携事業であり、同時に豊橋地域の農工連携事業でもある。そして、豊橋地域の経済活力を活性化させる一つの力となる可能性も期待できる。

「空洞化」した市街地域の修復作業は、松山校区の人々の力の結集を必要としているが、その方法は様々であり、取組む課題に応じてその課題に対応する人々の構成は変わることになろうし、校区を越えた提携も当然のことながらありえよう。ただ、校区内の人々の「まちおこし」への努力の積み重ねこそ、明るい明日の地域活性化の原動力であることは間違いない。

(2) 蚕都豊橋

当地が、蚕の都として全国的にその名を知られるようになったのには３つの好条件があったからだと考えられる。一つには、明治15年（1882）に豊橋地方最初の機械製糸工場を創立した朝倉仁右衛門氏、玉繭の研究から玉糸製糸法を考案し、明治25年（1892）に全国初の玉糸工場を設立した小渕志ち氏、このような研究熱心な先駆者、指導者がおられたこと、二つ目には、東海道線の開通と豊橋駅の開業により交通網が充実されたことであろう。これにより、当時、生糸市場であった横浜及び関東・関西の工業地との距離が縮まり連絡が容易になり、地元において不足する原料等の入手が容易になったこと、三つ目は、製糸業の発展は同時に繭糸問屋街をつくり、繭の集荷、生糸・玉糸の取引きが活発になったこと。このことは農家の養蚕熱を高めることを助長した。いずれにしろこの３つの条件は時を得たものであった。

松山校区にも、清水・浅井製糸所、豊橋紡績㈱、網太㈱など歴史に残る立派な会社があった。従業員の数も100名を超え、県外からも従業員を採用していた。

かつて我が国の輸出額の50%を占めていた蚕糸業も、主な輸出先国である米国がナイロン等の化学繊維の開発普及等により、我が国の製糸業もそのあおりを受けて衰退せざるを

得なかった。松山小学校南隣りの清水製糸所も思い出とともに長い歴史を閉じているし、また、前田南町２丁目の浅井製糸所も約百年の歴史を平成８年（1996）に閉じることになった。浅井製糸所の跡地には、カー用品の店が進出し営業を始めた。昭和15年（1940）から平成４年（1992）８月まで52年間操業した豊橋紡績㈱も閉鎖、跡地にパチンコ店が進出している。

郡是製糸㈱豊橋工場（現グンゼ㈱）は、昭和16年（1941）９月19日から昭和33年（1958）４月30日まで操業していたが、その間、昭和18年（1943）から昭和23年（1948）１月までの５年間軍需工場として操業した歴史をもっている。

その後、ミスズセロファン㈱と愛知セロファンが合併してアイセロ化学㈱となったが、石巻本町に新工場が建設されたので移転、跡地にジャスコ前田南店が昭和54年（1979）４月から開店したが、平成18年（2006）２月に27年間の愛顧を謝しつつ閉店した。

前田南町２丁目に県の繊維関係の機関が設立された。愛知県繭検定所（愛知蚕業センター）は、昭和８年（1933）５月に開所、平成10年（1998）３月31日に閉所している。跡地に前田南住宅（県営）が建設され約80世帯が入居している。

三遠玉糸同業組合玉糸検査所が明治41年（1908）６月に開所している。途中、昭和23年に生糸協会生糸検査所と改名し、昭和46年（1971）に愛知県繭検査所に業務を移管している。県繭検査所も平成10年に閉鎖し、その役目を終えている。跡地は中部体育館、豊橋高等技術専門学校（旧職業訓練所）が利用している。

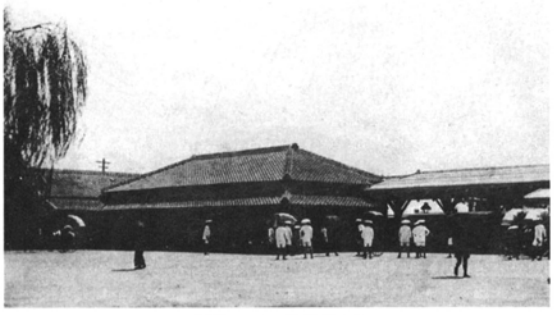
ジャスコ前田南店の東側に隣接する愛知県産業技術研究所三河繊維技術センター豊橋分場のみが、唯一県の機関として残っている。

前田南１丁目に漁網会社の㈱網太がある。網太も区画整理等により郊外に転出し、跡地には家電のエイデン、衣料のユニクロが進出し賑わっている。

3　交通網

（1）東海道線と豊橋駅の開業

明治21年（1888）９月１日、東海道線名古屋～浜松間が開通し、豊橋駅が繁華街の上伝間から600ｍほど離れた花田村に開設された。



明治21年豊橋駅舎

なぜそんな辺鄙なところを選んだのか？それには訳がある。当時の住民は鉄道の真価を理解することができず、それより、耕地等を収用されるのを嫌い、至る所で鉄道の排斥運動が企てられた。それ故、豊橋駅はやむなく花田村に設けられることになったのである。

豊橋駅は名古屋～浜松間の途中下車、弁当販売、機関車給水などの機能を備えた格のある駅としてスタートを切った。

駅舎は約45坪（149㎡）、平屋建て瓦葺の何の変哲もない建物で、あたり一面は田んぼや麦畑、みかん畑であったという。間もなく市街地と直線で結ぶ道幅４間（7.2ｍ）、区間５丁12間（562ｍ）の停車場通り（ときわ通り）が開通した。この幹線はその後の豊橋の産業、経済や市街地の拡大など市の発展に大きく役立つこととなった。

豊橋駅が開業してすぐ、岡田恒三郎が構内

人力車の客待ち

人力車の営業を始めた。常時10台前後の人力車とその車夫が広場に集まり汽車の到着を待つ光景が目を引いた。また、翌22年（1889）には加藤庄六が弁当販売をはじめた。

明治45年(1912)、今度は駅から東に延びる新停車場通りが開通した。現在の広小路通りである。

大正５年豊橋駅舎

大正５年（1916）乗降者数と貨物の増加、あわせて非常時における第15師団の移動の問題ともからみ、豊橋駅の拡張とモダンな洋風建物に改築した。

東三河の現在の発展の原動力となった輸送網は、大正年間にその基盤がつくられたのである。即ち、明治30年（1897）開通の豊川鉄道、大正13年（1924）６月の渥美電鉄、大正14年（1925）７月の豊橋電気軌道、昭和２年(1927)６月１日の愛知電氣鉄道の吉田駅乗り入れで輸送網の基盤が整備された。

昭和20年（1945）６月の戦災により焼失、昭和25年（1950）３月駅舎が建てられた。

民衆駅の完成

総工費の70％を地元で負担し、残りを運輸省が持つという全国でも異例の民衆駅として完成した。現在では珍しくもない形態であるが、当時としては画期的な事であったかもしれない。民間施設として理髪店、果物店、食堂などが設けられ、階上に市民出資の百貨店がつくられた。この立派な駅は、明けゆく豊橋の玄関口としての威容を誇り、昭和28年の浜松と名古屋間の電化の完成とともに「特急はと」が停車することになった。

昭和39年（1964）全線が電化されて10年目には、早くも東海道新幹線が営業を始めた。

更に昭和45年（1970）６月旅客等の利便性と都市の美化を兼ねた近代的な駅舎に改築、豊橋市の玄関に相応しい駅となった。

昭和45年当時の駅舎

平成８年(1996)、市制90周年事業の一環として、橋上駅に大改築、東西自由連絡通路、

駅舎、ショッピング街がオープンした。ペデストリアンデッキなど駅前設備は平成９年（1997）３月に完成した。

現在の豊橋駅舎

（2）豊川鉄道・吉田駅

明治29年（1896）２月、資本金50万円で豊川鉄道株式会社が設立され、東海道線との接続起点として豊橋駅の北側に吉田駅を新築する。明治30年（1897）７月に豊橋～豊川間、次いで三河一宮、新城、大海へと延長し、明治33年（1900）９月に総延長28㎞を単線で完工した。愛知県内で最古の私鉄である。

大正14年（1925）７月に電化し、懐かしい玩具のような蒸気機関車は姿を消した。昭和17年（1942）には、およそ50年の歴史に終止符を打ち、豊川鉄道（豊橋～大海）、鳳来寺鉄道（大海～三河川合）、三信鉄道（三河川合～天竜峡）、伊那鉄道（天竜峡～辰野）とともに政府に買い上げられ、国鉄飯田線（豊橋～辰野間196㎞）となる。現在の（JR東海）飯田線である。

（3）豊橋の市内電車

近代都市を目指す豊橋の課題の一つは、市内交通の充実にあった。大正13年（1924）資本金50万円で豊橋電気軌道株式会社が設立されたのも、こうした機運の高まりが背景にあったからである。

大正14年７月14日、ついに市電が走り始めた。豊橋駅前～新停車場通り～神明町～大手通り～公会堂前～錬兵場前（豊橋公園前）を経て赤門までと、神明町～柳生橋間（昭和51年廃線）が開通した。このため、新停車場通りは以前にも増して賑やかになった。

昭和23年（1948）戦災復興計画の道路拡張に伴い広小路線を廃止し、駅前大通りに移る。これを機に複線化し、終点の坂上よりさらに東に延び競輪場前、そして赤岩口へと延長していった。昭和57年（1982）７月31日豊橋市運動公園の完成に伴い、公園に至る路線600ｍが新設された。

平成10年（1998）２月19日、ペデストリアンデッキ下まで軌道を延長し、駅を利用する乗降客の便宜を計った。

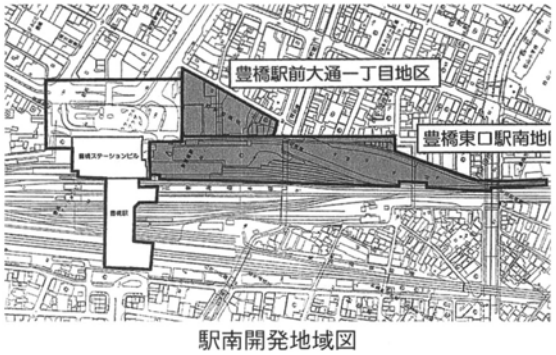
平成17年（2005）３月31日には、撤去された歩道橋の跡に「駅前大通り停留所」が新しく開設された。

4　伸びゆく松山

（1）東口駅南地区都市拠点開発事業

中心市街地活性化のため、駅南地区において鉄道・駅の再編と低未利用地の開発を行い、商業施設や公共施設の導入を図る。

土地区画整理事業：2.9ha　花田跨線橋のところで渥美線が北東方面に大きくカーブしている。この渥美線が真直になるよう南西に移設する。そして土地区画整理事業を推進する。



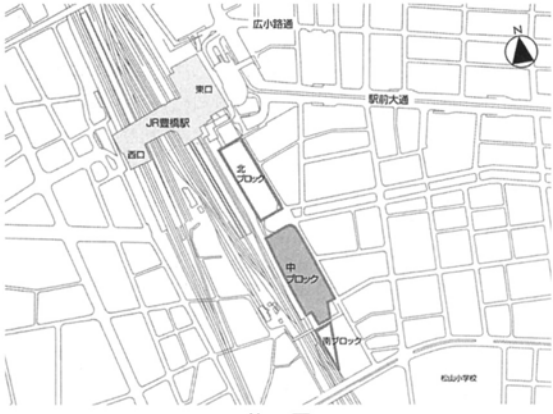
駅南開発地域図

自由連絡通路整備事業：70m　新設された渥美線新豊橋駅と東西自由連絡通路の間に連絡通路を設ける。（階段、エスカレーター、エレベーター）

ペデストリアンデッキ整備事業：220m　総合文化学習センター（仮称）までペデストリアンデッキを延長する。

(2) 総合文化学習センター（仮称）整備事業

市民の生涯学習、芸術文化活動の支援や振興を図るため「生涯学習センター」、「地域図書館」、「芸術ホール」で構成する施設を整備する。



位　置

立地　建設場所は鉄道、路面電車、路線バスなど公共交通機関が集中する豊橋駅から至近距離にあり、利用者にとって分かりやすく、訪れやすい場所である。

敷地の位置：豊橋東口駅南土地区画整理事業地区内の中ブロック

敷地の面積：約7,500㎡

生涯学習センタセンター　地区市民館、校区市民館の公共施設や大学、カルチャーセンターなど民間施設が市民の学習活動を支える施設として運営されてきたが、今後、生涯学習をより一層推進していくためには、環境の整備や自主的な学習活動への支援、学習情報の提供、学習機能相互の連携が広く求められる。生涯学習推進のための機能の集約、高度で特色のある学習機能を持った地域の生涯学習推進機関としてのセンターの整備が必要。

地域図書館　高度情報化時代に対応した高度な図書館情報の収集と発進による利用者の知的活動の支援、ビジネス活動のための情報の提供など立地性と先進性を生かした地域図書館として高い効果が期待される。

生涯学習センターや芸術ホールとの複合した施設であるため、これらを図書館機能の面から支援する。

交通の結節点という立地を生かし、通勤・通学者、買い物客等と地域住民を対象とした図書館であるので、気軽に立寄って知識や情報を得られるような図書館サービスを行う。蔵書数10万冊の開架図書を備え、気軽に利用できる環境に配慮する。

視聴コーナーや電子資料コーナーなどを想定し、様々な資料の提供を目指す。

芸術ホール　今後、目標として整備していくホールは、音楽、演劇、伝統芸能などの目的にかなった整備が必要であり、豊橋市が求めるものは、優れた舞台芸術を鑑賞、上演できるホールであり、舞台と客席が一体感を持てるホールを整備することである。

このようなホールは、豊橋の「顔」として全国に発信できる新しい芸術文化の創造、発信拠点として、国内だけでなく、国際的な文化交流をも実現できる施設として期待される。

芸術ホール

第3章　教育と文化

1　教育の充実

(1) 寺子屋の教育

庶民の初歩的な教育は、主に寺子屋や私塾で行われた。寺子屋では先生を師匠、子供を筆子と呼んだ。吉田の寺子屋の師匠は僧侶が50%に及んだが、武士や神官、町人、百姓などのうち、学識のある者が寺子屋を開いた。寺子屋に通う子供は、男子が主で、女子の多くは針師匠について裁縫を習う程度であった。

寺子屋

吉田の寺子屋は、およそ200か所あったといわれ、そのほとんどが幕末に開かれている。筆子の数は数人から20～30人程度までが多かったが、吉田指笠町の願成寺の筆子は150人もいた。

入門の年令についての決まりはなかったが、７～８才になると通い始め、およそ４年間学んだ。入門の時期は、概ね正月11日または２月の初午の日で、親が手習い道具を入れた文庫と机を持参した。入門料としてだいたい250文から300文ほど支払った。また、授業料は盆と暮れの２回で入門料と同額程度を支払った。寺子屋の年間授業日数は、200日くらいで、授業時間は毎日朝５つ時（午前８時）から夕方７つ時（午後４時）頃までであった。

学習内容は、一般に「読み、書き、そろばん」と言われるが、大部分の寺子屋では習字が中心であった。手本の文字は「いろは」に始まり、吉田の町名、村名、付近に住んでいる人の名前、日本全国の国名の順序で、ここまで習うのに３年半ほどかかるのが普通であった。次に学ぶのは「是非短歌」で、こうして日常生活に必要な文字を大体習い終えたのである。幕末松山校区にあった寺子屋は次のようである。

名　称	身分	科目	人　数	所　在
願成寺	僧	書読	１６０	指笠町
秀文堂	藩士	算	２９０	新銭町
浄円寺	僧	真宗学	３００	豊楽町
神宮寺	僧	書読	４０	紺屋町
正行院	僧	書読	２０	中柴町
正林寺	僧	書読	２０	花ヶ崎村

(2) 初等教育（旧制）

明治５年（1872）国民皆学をめざして学制が公布された。翌６年になると豊橋の区域には「第１番小学関屋学校」という番号付きで16校が開校した。明治19年（1886）には小学校令、明治23年（1890）に新小学校令が制定され、初等教育の基本方針が定まるとともに、小学校への就学が義務づけられた。明治36年(1903)の国定教科書制度は、教育勅語の発布と同様国家主義の色彩を一層鮮明にした。

① 狭間尋常小学校

豊橋町は明治39年(1906)、花田と豊岡村を合併し市制を施行した。

明治41年(1908)、義務教育年限が４年から６年に延長された。当時、豊橋市内には岩田、東田、八町、新川、松葉、花田、豊橋高等小の７つの小学校があったが、このうち市街化の著しかった豊橋駅附近では、就学児童が急増した。特に、製糸業の急速な発展で、花田小と新川小では校舎が児童の収容能力をはるかに超えるようになり、尋常小学校は増設の必要に迫られた。

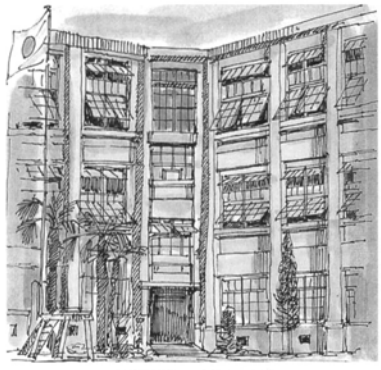
狭間尋常小学校開校

こうして松葉、新川、花田の３校から分離し、狭間尋常小学校は明治42年（1909）10月１日開校した。児童数は、1,033人で16学級教員は18人であった。

学級編制は、６年を除けば各学年とも男女別になっていた。それは男子と女子とは先天的に性質を異にしており、各々の天性を充分に発揮させていくには、男女を分けて指導した方が良いという文部省の考えからであった。この学級編制は戦後の昭和21年度まで続いた。

昭和20年（1945）６月20日、夜半の戦火により木造校舎が全焼し、鉄筋コンクリート造りの講堂の屋根が焼け落ち、内部は全焼した。

そんな折、昭和20年10月の市議会で、狭間国民学校を廃校とすることが決定した。その主な理由は、児童数が激減したことや松山国民学校との距離が132間（238ｍ）しか離れていないこと、そして市の中心部に位置し、将


幻の狭間小学校

来繁華街になるはずで、そこに学校を置くのは適当でないということであった。この決定は、終戦後僅か２か月という早さであった。

昭和25年（1950）７月、狭間小の敷地に神明町南の市民市場が移転、敷地の一部を公園とし、既設のプールを残し市民に開放、別の一部を乾繭取引所に払い下げ、鉄筋３階建ての校舎は公民館としたが、昭和33年（1958）に取り壊された。

昭和24年（1949）12月31日をもって、創立40年の輝かしい歴史の幕を閉じた。昭和25年１月９日、480名の児童たちは12名の先生に引率されて松山小学校へ行き、城海津地区の41名の児童は松葉小学校へ編入された。

二宮尊徳像

下狭間橋は、狭間小学校の正面のすぐ前にある。正面を入って右側に行くと二宮尊徳の銅像があった。その銅像は、昭和17年（1942）国に供出され、その跡に石像の二宮尊徳が置かれていたが、昭和24年には松山小学校へ移転された。今、狭間小学校はない。しかし、多くの狭間小卒業生の胸の中には思い出とと

もに生き続けている。当時を偲ぶ卒業生の手によって、昔の姿で残っていた石像を平成元年（1989）秋、学校跡地（名豊ビル前）に復活した。

その後、平成16年（2004）には、名豊ビル前から狭間公園に移動し、南を向いて建っている。

② 松山尋常小学校

新設された狭間尋常小学校も、南部地域（松山）の発展が続き、間もなく狭間尋常小学校の校舎も不足することが分かったので、早くも明治43年（1910）３月、花田町字間田にある市有地1,400坪（4,620㎡）に小学校を新設する計画を立てた。

松山尋常小学校開校

明治45年４月、花田町字間田に田３反５畝（3,465㎡）を買収し、２階建て校舎一棟を新築して狭間小学校から分離独立して校名を松山尋常小学校として発足した。学区は、東海道本線以東、牟呂用水以南柳生川までの地区であった。狭間尋常小学校から450名の児童が転学し、開校時の児童数507名、学級数11、職員数は13名であった。

昭和11年（1936）、鉄筋コンクリート３階建てに改築、昭和12年プール竣工、昭和20年（1945）６月の空襲により木造校舎全焼、昭和24年（1949）５月Ａ校舎２階建10教室竣工、昭和37年（1962）屋内運動場兼講堂竣工、昭和40年（1965）にはプールの新築を完了する。その後、特別教室、教育用テレビジョン、放送施設などの設置を完了し近代的な小学校となる。

当初500名余りの児童で開校したが、昭和の初期には1,000名余り、昭和20年には1,600名、戦災により700名余り減少したが、昭和30年（1955）には1,800名を数えマンモス校へと発展したが、その後は市街地域のドーナツ化現象や少子化のあおりを受け、昭和54年（1979）には男女ほぼ同数の児童数822名、21学級、平成18年（2006）には児童数298名（男子163名、女子135名）まで減少してしまった。

視聴覚教育　視聴覚教育の歴史は46年に及ぶ。学校放送番組を利用する学習を展開したのは昭和34年（1959）のことである。昭和42年（1967）文部省、県、市より「教材映画の利用について」の内容で研究指定を受け、昭和43年（1968）11月に研究発表を行った。視聴覚ライブラリーと一体となった研究は大きな成果をあげた。

教材映画の利用

昭和55年（1980）、「視聴覚教材の研究」に取り組み、理科と社会科に絞って関連をもたせ「生きた豊川」のビデオを作製、これに基づいて授業を展開した。また、この年11月には学校視聴覚教育全国大会会場校として研究発表を行っている。「視聴覚教材利用の研究」は、全国の先生方に感銘を与え高く評価された。文部大臣賞・日本視聴覚教育会賞の受賞等、「視聴覚教育の松山小」、「松山小の視聴覚教育」と謳われ、その名は全国にとどろいた。

交通安全教育　急速な自動車の普及に、道路整備や信号機の設置が追いつかず、自動車事故が続発した。

松山校区でも、駅前の繁華街を控えていることや国道259号線、跨線橋があることなどから交通安全教育は大きな課題であった。

交通安全教育

昭和46年（1971）４月26日、市の教育委員会より交通安全教育の研究委嘱を受けた。また、校区総代会でも「交通安全モデル校区」としての運動を展開し、ここに学校、ＰＴＡ、校区の３者による協力体制が確立された。

交通安全指導の特徴としては、バス下校の実施、自転車免許の実施、交通安全標語の募集などがあった。特に、標語の応募点数は、515点にも及び、その関心の高さをうかがわせた。

こうした取り組みを行った結果、児童の交通事故は非常に少なくなった。その後も引続き交通安全に学校ぐるみで取り組んだ結果、昭和61年（1986）度に県から交通安全優良校として表彰された。

校章の制定　明治42年（1909）開校の狭間尋常小学校と、明治45年（1912）に開校した松山尋常小学校が都市計画に基づいて昭和24年(1949)12月31日に合併した。この機会に、共に数十年の歴史を持つ両校の校章を組み合わせ、昭和25年（1950）１月８日に新しい校章を制定した。校章の図案は、合併当時の校長

校　章

坂口菊夫氏が制作したという。狭間小学校の校章は、吉田藩主大河内氏の家紋３蝶円内16葉菊のアゲハチョウの一匹をとり図案化したものという。また、松山小学校の校章は、松皮菱の中に「山」の字を配したものであり、この両者を組み合わせて新しい校章としたという。また、狭間小学校の蝶は明治末期の豊橋の代表的産業である生糸の繭の蛾であるという説もある。

③　中部中学校

昭和22年（1947）４月１日、豊橋市立中部第１中学校創立、生徒数970名、職員34名、昭和22年度より新学制（６・３制）が施行され、豊橋高等小学校在学中の生徒はそれぞれ３年生、２年生へと進級、新たに狭間小、松山小、新川小の卒業生が入学し、４月18日豊橋市立中部第１中学が開校した。また、この日徳島校長先生の作である校章が制定されている。

昭和23年（1948）10月１日、豊橋市立中部中学校と校名が変更された。

昭和32年（1957）11月15日、創立10周年記念式典を挙行、10周年を記念して校歌が作られた。作詞は郷土の詩人丸山薫先生、作曲は氷見貞三氏であったと記憶している。

戦後のベビーブームの絶頂期、年々増加する生徒数、足りない教室・・。学校にとっても、生徒にとっても、そして父兄にとっても切実な問題であった。そんな時、ＰＴＡは、

これらの問題を解決するため、「分校に関する陳情書」を提出した。

昭和35年11月26日、待望の９教室が増築されたが、生徒数の増加には追いつけない。本校有史以来の超マンモス時代を迎えた昭和37年度には生徒数2,573名、学級数53、職員数72名の多きを数え、やむなく青空教室が現実のものとなった。そこで、ＰＴＡ後援会や校舎増築協力会が中心になり、市関係当局に強く陳情し、早期解決を要望した。

昭和43年（1968）３月８日、体育館竣工式、「雄飛館」と命名された。野球部、バレーボール部、バスケットボール部、陸上競技部では、男女ともども各種競技会で優秀な成績を収めているが、雄飛館の竣工は名門豊橋中部中学校の名を更に東海に馳せる原動力となり、中部中生徒の体育練磨の殿堂として益々その価値を高めることとなった。

昭和47年（1972）４月23日、創立25周年記念式典が挙行され、「創立時の中部中の夢を語る」と題した文化部の発表が行なわれた。

昭和55年（1980）11月６・７日全国から延べ5,000名の先生方を豊橋市に迎え、第32回学校視聴覚教育全国大会が開催された。本校でも12学級で教育機器を活用した授業が公開され、「ひとり一人の学力を伸ばす学習指導」ー思考を深め、意欲を高める視聴覚機器の実践―というテーマで、密度の高い研究発表も行なわれた。また、昭和56年（1981）12月19日には視聴覚教育賞を受賞した。

昭和61年（1986）11月22日～23日の２日間にわたり創立40周年記念式典がもたれ、初日は式典、音楽会、記念講演、翌日には文化祭が全校あげて盛大に開催された。

ー中部中学校創立50周年記念誌よりー

（3）中等教育（旧制）

初等教育は明治期を通じてほぼ完成され、中等教育、高等・専門教育の充実は大正期にはかられている。

明治26年（1893）に中等教育を希望する者のために、私立補習学校時習館が西八町に開設された。さらに、明治33年（1900）には県立第４中学校と名称を変えている。県立第４中学校の明治30年度（1897）入学生の年度末テストについて見ると、入学生99人中で及第70人、仮及第６人、落第22人、未試験１人という結果であり、中学校の学業評価が厳しかったことを物語っている。

このほか注目されるのは、私立豊橋商業学校である。当時、豊橋の主な産業が商工業であるにもかかわらず、実業教育を施す機関がなかった。豊橋商業会議所会頭であった遠藤安太郎は、公立商業学校の設置を町長に請願したが、受け入れらなかった。遠藤は独力で商業学校を設立する意思を固め、明治39年（1906）４月、国の認可を受けて私立豊橋商業学校を開校した。この学校は、大正12年（1923）に修業年限５年、生徒定員500人の豊橋市立商業学校として開校している。大正15年（1926）、豊橋市に県立中学校の中で13番目にあたる愛知県豊橋第２中学校が開校した。

また、女子の中等教育についてみると、男尊女卑の時代背景の中で、明治35年（1902）、三河で初めての女学校として豊橋町立高等女学校が設立された。

大正12年４月、豊橋市立実業補習学校が八町高等小学校に併設の形で開校した。昭和２年（1927）に豊橋市立女子商業専修学校と改名、さらに昭和13年（1938）に豊橋市立女子商業学校として生まれ変わった。

私立の各種学校としては、明治35年に伊藤卯一が創立した豊橋裁縫女学校（藤ノ花高校）、明治38年（1905）に中野彦助が創立した豊橋松操裁縫女学校（開校時は、豊橋南部裁縫女学校）、これに大正15年に満田樹吉が創立し

た豊橋実践女学校（桜丘高校）が加わり、600余人の女子教育にあたっていた。その後、昭和16年（1941）には高倉半次郎が愛知高等実修女学校を設立し、女子教育の機関はさらに充実した。

明治31年（1898）、塩津村拾石（蒲郡市）に耳、口の不自由な者を対象とする私立拾石訓唖義塾が開かれた。明治32年(1899)、豊橋町の小山与作がこれを豊橋に移転し、札木町に私立豊橋盲唖学校を設立した。現在の県立豊橋聾学校の前身である。

愛知県豊橋中学校　歴史をたどって行くと、２百数十年になる大変歴史のある学校である。現在の市公会堂前庭の片隅、毎日新聞社豊橋支局寄りに小さな標柱がたっている。

学校の所在地は、昭和の初めには中柴町（現在の大国町と東松山町の一部）にあった。敷地は、縦150間（270ｍ）、横100間（180ｍ）で１万５千坪（約５万㎡）の広さを誇る学校だった。しかし、その校舎は昭和20年６月20日の豊橋大空襲で焼失、戦後は解散した旧軍隊の兵舎があった現在の富本町に移転し、今に至っている。

豊橋中学の前身である吉田藩校時習館は、宝暦２年(1752)、時の藩主松平信復によって設立された。愛知県内でも尾張藩校明倫堂に次いで２番目に設立された学校である。

愛知県豊橋中学校

以後120年間、明治５年（1872）の廃校に至るまで、旗本の人材の育成に優れた役割を果たしたと言われている。

明治５年の廃校以来20年間空白だったが、三浦碧水、杉田権次郎、児島徳らが時習館の復興運動を起こし、明治26年（1893）に私立補習学校時習館が設立された。それが愛知県立時習館高等学校創立百周年の最初の年になっている。

教育の基本である文武両道、質実剛健の校風は、豊橋尋常中学校時習館、愛知県立第４中学校、そして現在の愛知県立時習館高等学校へと受け継がれているのである。

2　寺社と史跡

（1）吉田御坊

花園商店街、広小路商店街など賑やかな街並みのすぐ裏手に東本願寺別院を取り囲むようにして真言寺院がある。吉田御坊とは、東本願寺の豊橋別院のことである。

豊橋別院は、後に東本願寺を建立した教如が文禄４年（1595）花園町に来て創建したものである。

鎌倉仁治（1240～43）の頃、川毛の森の中に西竺寺という真言寺院があったが、このあたりを発展させるため積極的に寺院を誘致した。すなわち、康和３年（1101）足助から正行寺（蓮泉寺）、永正６年（1509）正琳寺、永正５年浄円寺を、大永年間（1521～28）西尾から無量寿寺（応通寺）が、そして願成寺等も相次いで移転して来て、付近一体は寺院街として開けてきた。

天正２年(1574)、城主酒井忠次が川毛の寺街から真言３か寺を羽田地（花園地）に集団移転させた。この時、馬見塚から蓮泉寺、伊奈から仁長寺も移ってきた。文禄４年、東本願寺宣如は城主の松平忠利から西竺寺に割り当てられた広大な寺域を請い受け、山号を西竺山誓念寺とし、東本願寺末御坊とした。坊

中は応通寺、蓮泉寺、浄円寺、正琳寺、仁長寺の真言５か寺となった。

戦前の御坊様は、花園町の中程から西に通じる広い門前が入口にあたり、突きあたりに浄円寺があり、左に折れ、鍵の手に右に折れると広くて長い参道があり、南に２か寺、北に３か寺の伽藍が立ち並び、正面には大きな山門（太鼓門）があった。境内を入ると左に鐘楼、その奥に本堂大伽藍が聳えていた。

現在の御坊

昭和20年（1945）６月の豊橋空襲で全寺焼失し、戦後は区画整理によって東西南北に道路が貫通し、大きく変わった。

昭和21年（1946）二川の糸徳製糸の大講堂を買収、移転して仮本堂とし、これを園舎にもあて花園幼稚園が再建された。

世情の好況につれ、浄円寺は大村町に移転、昭和60年（1985）鉄筋本建築の別院本堂が完成した。

（2）正林寺

創立は弘長２年(1262)、開基は春岳栄燿尼、本尊は別室に安置の千体地蔵尊といわれていて、吉田綜録にその全文が載せられている。

鎌倉執権の時代、筑紫の大井原田次郎種猶は鎌倉への出仕の時、同僚高橋修理太夫の讒に遭って、家臣は由井ヶ浜で討たれ、その身は土牢に囚せられて、13年を経た。種猶の一子花若丸は、生長と共に父を思慕しつつ仏法に帰依し、弘長２年13歳の時、鎌倉に下って由井ヶ浜で戦場の枯骨を集めて千体地蔵尊を造り、厨子に納めて家臣藤王丸に担わせ、花若自身は傍らに寄り添って説明しながら鎌倉の市中を歩いた。その清容は地蔵尊の再来かと思われ、その事が執権時頼の耳に達して謁見の上牢舎説法を許されたので、牢舎を巡って最後に土牢に至った時、足腰立たぬ囚人を見た。これこそ日夜思慕した父種猶であった。執権の再調によって冤はそそがれ、種猶は改めて三州足助の城主とされた。種猶はこれ偏に花若の孝心と地蔵尊加護の賜物であるとして一寺創立を思い立ち、三州飽海庄で海岸沿いの花ヶ崎の景勝地を相して伽藍を建立した。

正林寺

その後、足利義満の帰依を受けた梅山聞本和尚を請じて再興開山とし、臨済宗を改めて曹洞宗となり竜拈寺末寺となった。境内に「呉竹の泉」がある。参道の左側やや離れたところにあった。うっ蒼とした繁みの中の涯下に渾渾と湧き出る清水、昔この清水でお茶をたてて藩主に献上したと伝えられている。

明治の頃、第15師団、歩兵第18聯隊の兵隊達も「この清水だけは呑んでもよい」と許可されたという。兵隊達も、軍馬も行軍の途中この清水で寸時の憩いをとり、元気を取り戻したということである。吉田の３名泉の一つに数えられている。

（3）唯心寺

創立は元和３年（1617）、開山は尊誉法師、大正２年（1913）現在地に移る。

尊誉は元九州島原の重臣でキリシタンの徒であったが、慶長以後の大弾圧に遭ったため三河の深溝に逃れ、爾来深く仏教に帰依して祝髪し、初め天台僧となり、後浄土真宗に転じて渥美郡野田村保井に一寺を創立した。

唯心寺

旧幕時代西円寺の末寺となっていたが、維新後は本山直末となり、大正２年、住持徳存師は単身来豊の後、百方奔走して教化に務め、遂に多数の信徒を得、数年に亘って本堂、庫裡、鐘楼、山門等の伽藍を造営した。戦時中、梵鐘を初め仏具什器の一切を供出、６月20日の兵火に一山全部焼失し、農地法によって耕地、山林約８反歩(7,934㎡)を失った。

戦後直ちに復興を計画し、昭和21年（1946）まず12坪（約40㎡）の住宅を建て、昭和24年庫裏37坪（122㎡）、昭和26年本堂６間４方（117㎡）等の諸伽藍を建設した。この本堂は越後頸城郡熊川村の廃寺の本堂用材を用いて再建したものである。

（4）郷村松山神社

祭神　スサノオノミコト

鎮座　豊橋市西松山町43番地

享禄元年（1528）の創立と伝えられ、今川家に属する三河７騎のひとり渥美準慶という人がこの地に住んでいて、牛頭天王を勧請奉祀し、郷村神社を建てて氏神とした。

明暦３年（1657）この地の住民、産土神として再興し、それ以来牛頭天王または松山天王と称えてきたが、明治元年（1868）この神社を村全体のものにするため雄進社と改め、素盞嗚命を祭神とし、大正11年（1922）12月11日松山神社と改称する。戦前、松山神社は今の松山公園一帯を敷地とし、その中にあった。

昭和20年（1945）戦火により焼失、昭和25年（1950）に本殿、幣殿、拝殿を、尚社務所、英霊社、秋葉社、塞神社等を次々に造営完成する。

昭和47年（1972）12月23日学童の失火により本殿、幣殿等焼失したが、御神体、御幣、御神鏡はいずれも安泰であった。

郷村松山神社

昭和50年（1975）５月、氏子の浄財により鉄筋コンクリート造りの本殿、幣殿、拝殿ともに再建することができた。この再建に際し、伊勢神宮から桧の古材17石（4.7㎡）の払い下げを受け、社殿の内装の柱・板とした。

賽神社

祭神　ヤチマタヒコノミコト　岐の神
　　ヤチマタヒメノミコト　猿田彦命

鎮座　松山神社境内

神祇辞典には「サエノカミ」「塞神、障神、幸神」とあり、交通安全の神だけでなく、すべての災害を防ぐ神として古くから尊崇された。明治３年（1870）11月の「三河国渥美郡花ヶ崎村、産土神社委詳書上帳」には、「享保13年（1728）３月吉日奉造営、勘請之儀年歴不分、以上」とあるのだから享保年間以前から花ヶ崎村の東郷（松山町）、中郷、西郷（羽根井町）の三郷によって奉斉してきたの

を後年土地改良のため、松山神社境内にご遷座したものである。

(5) 諏訪神社

祭神　建御名方命

鎮座　豊橋市中柴町46番地

永仁元年（1293）、雲州小野田に住む鳥羽院従臣小野田宗弥俊成は、文治５年（1189）源義経公の奥州下向の時、信州下諏訪まで同道し、その時、信濃の国諏訪大社の分霊を勘請して一村の鎮守と仰ぎ、諏訪明神を村の鎮守とした。時に建久３年（1192）７月23日のことである。当時、武将や庶民の崇敬篤く、天正７年（1579）酒井忠次、寛文５年（1665）小笠原長頼らが社殿を造営した。

諏訪神社

明治元年（1868）神社制度の改正により諏訪大明神改め、村社諏訪神社となる。昭和20年（1945）の空襲により全焼したが、昭和34年（1959）までにすべて復旧された。

平成11年（1999）３月13日午後２時30分頃不審火による火災が発生し、本殿全焼、社務所半焼の災害を受けたが、氏子らの浄財を得て、平成12年（2000）10月20日神社の再建を完了する。なお、同年11月３・４・５日遷座祭および奉祝祭を執り行った。

(6) 大己貴神社

祭神　オオナムチノミコト

鎮座　豊橋市大国町79番地

創立年代不詳、その昔豊川入道淵のほとりに鎮座する。永正２年（1505）、牧野古白の吉田城築城に際し、士族屋敷に遷座する。歴代吉田城主の篤い崇敬を受ける。明治18年（1885）吉田城跡に歩兵18聯隊が創設されることになり、西八町に遷座する。明治35年（1902）廃藩置県により諸々の制度が改められ、当時の新川町の住民が旧藩主よりその神をいただいたのが始まりといわれている。

大己貴神社

昭和９年（1934）12月25日道六町の氏神として迎え、町名を大国町と改称する。商売繁盛、縁結びの神として豊橋地方の信仰をあつめている。昭和20年６月戦火により全焼する。戦後、町の有志により羽田八幡のお祠をいただき、新しく「おおなむちのみこと」を拝し、形は無いが前のご神霊を併せて社殿にお迎えしてお祀りすることになったものである。大国主神は素盞嗚命の子または６世の孫といわれ、別名大己貴命といわれる。

(7) 白山比咩神社

祭神　イザナミノミコト、菊理姫命

鎮座　豊橋市広小路通３丁目82番地

白山社の本宮は、加賀の白山比咩神社である。日本３名山の一つである白山を神体山とする。

広小路にある白山比咩神社は、魚町の安海熊野社の脇宮として奉斎された。保延２年（1136）札木あたりにあったが、その後天正

18年（1590）魚町に遷り、さらに地域拡張されて現在地に遷座された。古来、武将庶民の遵信篤く、白山権現と敬われていたが、明治4年（1871）現名に改め、明治11年（1878）11月30日に遷宮を行う。戦前の白山神社は新銭町の中程にあり、境内は比較的広く、その中央には樹齢百年という大イチョウが聳え、昼なお暗くいつも深閑としていた。

白山比咩神社

白山社は新銭町、下り町、抱六町の産土神であった。寛文5年（1665）神輿を造り、祭礼の日には神輿を中柴の諏訪神社、神宮寺の社と渡御した。氏子はいろいろな勝花を造り、それを背負って供奉したので、花祭と親しまれた。吉田駒引銭は、この境内でつくられたといわれる。

昭和20年（1945）、米軍の空襲によって罹災し、さらに土地区画整理によって地域は大幅に縮小された。そして、昭和30年（1955）10月現在の社殿を再建した。

（8）素盞嗚神社（通称輪くぐり様）

祭神　スサノオノミコト

鎮座　豊橋市新本町41番地

当神社は吉田神社の下の宮で、俗に横町の天王様と言われ、古くは「二日市天王」、「二日市牛頭天王」、「鎌倉荒神天王」、「疫病天王」、「吉田下天王」、「興休天王社」などと呼ばれたが、現在一般には「輪くぐり様」で通っている。文治2年（1186）の創立といわれている。鎌倉殿の命により石田為久が社参、分神霊を二日市天王社に建立したのが現在の素盞嗚神社といわれている。

古来より領主並びに庶民の尊信篤く、慶長9年（1604）領主玄蕃守社殿を造営したのをはじめ、26度歴代藩主の造営修理が行なわれた。

素盞嗚神社

昭和20年6月の戦火により焼失した社殿は、宝永8年（1711）牧野大学成実の造営といわれている。

明治の初め神社制度の改正にあたり、天王社の称号を廃し、素盞嗚命を祭神と仰ぎ、社名を素盞嗚神社と称するようになった。

夏越祭（なごしのまつり）　古くから毎年7月31日の夜「夏越祭」が行なわれ、「輪くぐりの神事」が盛大に行なわれていた。この神事は、まず神官によって「祓」の行事が行なわれ、参詣の人々は茅の輪をくぐり身のけがれを払い清め、ご神体「神葭様（かみよしさま）」を拝し、厄を人形に負わせて疫病をのがれ、この夏を無事に越すよう疫病除けの神、天王様に祈願する。

夜中の神事を終わって、神官祭詞を奏し「神葭様」を大橋へ送り、大川（豊川）へ流す。この輪くぐりの神事は、今から139年前に書かれた「諸国風俗問状三河国吉田領答書」にも詳しく書かれている。これによると、この「神葭様」の流れ着いた川下の郷村では、これを神の降臨として、着いた日又は翌日、村人は皆垢禽をとり仕事を休んでこの神葭様を直

ちに川より取り上げて、生土神（うぶがみ）の社地の内に別に仮宮を造ってこれを納め、75日間毎夜神灯を献じてお祀りし参詣した。

（9）村社神明社

祭神　　天照大神
相殿　　持統天皇
境内社　秋葉神社
鎮座　　豊橋市前田南町２丁目20番地の３

当神社は、延喜元年（901）２月４日の創立と伝えられている。文久４年（1864）３月火災により古文書類焼失、詳細は不明である。東三河地方は早くから伊勢神宮と密接な関係があって、神明社の数も多い。

村社神明社

文治５年（1189）源頼朝の使者より牛頭天王を勧請された。当時、この地域は薫瀬と呼ばれ、南を流れる川は薫瀬川（現柳生川）という名称であった。この時代、吉田神社が頼朝の格別の崇敬を受け繁盛し、神明社とも密接な繋がりができた。

正保２年（1645）吉田城主小笠原壱岐守の崇敬を得て神殿を改造する。その後も歴代城主の敬拝を受ける。寛文２年（1662）小笠原壱岐守忠知公より藤原長房銘の刀一振り奉納があり、同じように寛文７年（1667）酒井讃岐守から藤原国貞の刀一振の奉納があった。御神刀として大切に継承されている。

至徳２年（1385）、大永６年（1526）在名の棟札を始めとして、昭和54年（1979）土地区画整理事業に伴う神殿、拝殿、社務所、鳥居、灯篭等すべて移築修理し、還座修復事業の完工の棟札に至るまで、22枚の棟札を所有している。

明治初年、神社制度の改正に伴い、村社神明社となる。毎年、元旦祭に引き続いて神聖な的射神事も行なわれ、先祖伝来氏子中の篤い崇高を受け五穀豊穣、無病息災を祈願し現在に至っている。
例祭は、毎年10月第２土・日曜日に挙行される。また、夏の風物詩として７月の第３金・土・日曜日に盛大に催される祇園祭も共催している。

（10）七面社

祭神　　七面大明神
境内社　稲荷社
鎮座　　豊橋市前田南２丁目13番地の３

当社の創立年代等詳細は不明である。七面社は、山梨県南巨摩郡身延町にある日蓮宗総本山の身延山久遠寺の守護神として西方向に対面する七面山（1,989ｍ）に開山されたものである。この七面山中の敬慎院に鎮座する七面大明神を江戸時代現在地の隣接地に、日蓮宗の一派法華宗「妙円寺（現在魚町112番地に移転）」があって、その境内社に勧請されたと伝えられている。

土地区画整理事業による所在地名称の変更（2000年）以前は、向山台地の南面傾斜地一帯が「向山町字七面」と正式に字名があった。

この七面社は、日蓮宗の様式で執り行われ、仏教色が強く顕われている。延享２年（1745）には信仰心の篤い人々が祖師講を組織し、熱心に信仰を捧げ、昭和の年代までは地元の人々のみならず近隣各地より一年を通じ多数の信者に崇敬されてきたが、現在は往時の面影は少なくなってきている。

松　山　校　区　略　年　表

時代（年代）		西暦	記事
延喜	元年	901	・石田神明社創立、明治初年神社制度の改正により村社神明社となる。
保延	2年	1136	・白山比咩神社は、魚町の安海熊野社の脇宮として奉斉された。天正18年魚町に遷り、さらに地域拡張されて現在地に遷座、「白山権現」とうやまわれていたが、明治4年、白山比咩神社に改称、昭和30年現在の社殿を再建、更に、この年に吉田天満宮を合祀した。
文治	2年	1186	・新本町の素盞嗚神社創建 明治の初め天王社を廃し、社名を素盞神社に改称する。
建久	3年	1192	・7月23日中柴諏訪神社創建。明治初年諏訪大明神改め、村社諏訪神社に改称する。
弘長	2年	1262	・花ヶ崎村に正林寺が開山し、開基は春岳栄燿尼、本尊は千体地蔵
享禄	元年	1528	・郷村松山神社創建。明治初年雄進社と改め、素盞嗚命を祭神とする。大正11年松山神社と改称する。
永禄	7年	1564	・徳川家康が吉田城を攻略。文禄8年3月開城させる。酒井忠次を城主に命ずる。
天正	2年	1574	・城主酒井忠次は、真言3ヶ寺を羽田地に集団移転させる。
文禄	4年	1595	・本願寺宜如羽田地（花園）をもらい受け、西竺山誓念寺とし、本願寺の末坊とする。坊中は応通寺、蓮泉寺、浄円寺、正琳寺、仁長寺の真言5ヶ寺となる。
元和	3年	1617	・唯心寺創建。開基は、尊誉法師。大正2年渥美郡野田村より現在地に移る。
寛永	14年	1637	・白山権現内に銭座を設け、寛永通宝を鋳造する。同じく吉田の鋳銭といわれるものに「吉田の駒曳き銭」と称する一種の絵銭がある。寛永17年には鋳銭廃止となる。
寛文	4年	1664	・藩主小笠原壱岐忠知、奥郡街道沿いに吉田天満宮建立。明治10年吉田天神社と改称、昭和30年白山比咩神社の一角に合祀される。
元禄	13年	1700	・吉田天王社祇園祭りに、初めて仕掛け花火を奉納する。
享保	13年	1728	・3月、花ヶ崎3郷で賽神社を造営勧請する。後年、土地改良のため松山神社境内に遷座する。
宝暦	2年	1752	・吉田藩校時習館が藩主松平信復（のぶなお）によって創立
文化	11年	1814	・中郷神社に文化11年に作成された花ヶ崎村の絵図が残されている。隣村の庄屋全員の立会いのもと村境を確認し合ったものである。
明治	5年	1872	・吉田藩校時習館廃校
〃	15年	1882	・朝倉仁右衛門が豊橋地方最初の機械製糸工場を設立する。
〃	17年	1884	・歩兵18聯隊の創設
〃	21年	1888	・東海道線　浜松～名古屋間開通、豊橋停車場開業。市街地と駅を直線で結ぶ停車場通り（現ときわ通り）の開通。
〃	22年	1889	・豊橋町制施行、三浦碧水初代町長に就任

時　代（年代）		西　暦	記　　事
明　治	25　年	1892	・小淵志ちが全国初の玉糸工場を設立
〃	26　年	1893	・三浦碧水、杉田権次郎、児島徳らの復校運動により、私立補習学校時習館として設立
〃	28　年	1895	・小野道平豊橋町長の提唱により、豊橋町立尋常中学時習館となる。
〃	29　年	1896	・２月豊川鉄道株式会社設立、明治30年開通 東海道線との接続点確保のため吉田駅を建設
〃	32　年	1899	・小山与作塩津村拾石の私立拾石訓唖義塾を豊橋移転、札木町に私立豊橋盲唖学校を設立 ・大野銀行豊橋支店開行 ・吉田孫吉が土雛の赤天神を世に送る。
〃	33　年	1900	・豊川鉄道大海まで開通、総延長27.9㎞単線工事完了 ・豊橋町立尋常中学時習館、愛知県立第４中学校となる。以後、大正11年に愛知県豊橋中学校に改称、昭和31年愛知県立時習館高等学校となる。
〃	35　年	1902	・豊橋町立高等女学校設立、豊橋市裁縫女学校（藤ノ花高校）設立
〃	38　年	1905	・牟呂用水路通水、全長24.6㎞、牟呂・神野新田1,090haを灌漑 ・豊橋松操裁縫女学校を設立
〃	39　年	1906	・花田村と豊岡村を合併、市制を施行する。 ・安藤安太郎が私立豊橋商業学校を設立
〃	41　年	1908	・第15師団司令部開庁 ・市内電話開通
〃	42　年	1909	・10月１日豊橋市狭間尋常小学校開校 児童数1,033名、16学級、職員18名
〃	44　年	1911	・10月、清水町に蝶春座設立
〃	45　年	1912	・４月、豊橋市松山尋常小学校開校 児童数507名、11学級、職員13名 ・新停車場通り開通ー戦後の恐慌の嵐をまともに受けた豊橋は、市の発展の方向を産業から15師団誘致に転換を図った。それには道路整備が付帯条件とされたため、明治43年から工事を始め、大正４年までに手掛けられた道路は40本に及んだ。
大　正	12　年	1923	・豊橋市立豊橋商業学校開校、豊橋市立実業補習学校開校 昭和13年豊橋市立女子商業学校と改称
〃	13　年	1924	・渥美電鉄（豊橋鉄道渥美線）６月開通、豊橋電気軌道株式会社（豊橋鉄道）設立
〃	14　年	1925	・７月14日市内電車開通（豊橋鉄道市内線）、昭和23年広小路線廃止、駅前大通りに移転するのを機に複線となる。昭和51年柳生橋線廃止
〃	15　年	1926	・愛知県豊橋第２中学校開校、豊橋実践女学校（桜ヶ丘高校）設立
昭　和	2　年	1927	・愛知電気鉄道（名古屋鉄道）吉田駅に乗り入れ

時　代（年代）		西　暦	記　　事
昭　和	4　年	1929	・国鉄豊橋駅西駅竣工
〃	6　年	1931	・豊橋市公会堂竣工
〃	7　年	1932	・神明町四つ角に丸物百貨店が開店し、昭和21年駅前進出 昭和46年豊橋西武百貨店となるが、平成15年撤退
〃			・前田南町誕生
〃	9　年	1934	・大己貴命12月25日道六町の氏神として迎え、町名を大国町と改称する。
〃	10　年	1935	・名古屋鉄道豊橋駅に乗り入れ
〃	12　年	1937	・松山尋常小学校プール竣工、幅10m、長さ25m
			・豊橋乾繭取引所開設
〃	13　年	1938	・４月国家総動員法公布、５月法施行
〃	14　年	1939	・狭間尋常小学校のプール竣工、幅10m、長さ25m
〃	15　年	1940	・米穀管理規則制定 11才～60才までの男女に１日当り米２合３勺（330ｇ）配給
〃	16　年	1941	・金属回収令施行　岩屋観音様が兵器に変わる。
			・国民学校発足
			・蚕糸業統制法公布、乾繭取引所閉鎖
			・愛知高等実修女学校（豊橋中央高校）創立
〃	17　年	1942	・食糧管理法施行
			・衣類の総合切符制実施
			・豊川、鳳来寺、三信、伊那の４鉄道を政府が買収し、国有の飯田線（JR飯田線）となる。
〃	19　年	1944	・３月愛知県学徒動員実施要綱発表、勤労作業通年動員である。
			・８月女子挺身隊勤務令公布
			・駅正面から神明町方面へ幅50mの軍用道路を建設するため、地域住民数百世帯が強制立退きとなる。
〃	20　年	1945	・豊橋空襲６月20日午前０時58分～３時17分までの２時間余りの波状焼夷弾攻撃、全焼全壊家屋は全戸数の70％、死者６２４名、被災人口全市民の50％、敵機数136機
			・６月義勇兵役法の実施により、国民義勇隊を結成
			・８月６日広島に原爆投下
			・８月７日豊川海軍工廠爆撃　死者2,500余名、重軽傷者１万余人
			・被災市民から赤痢患者発生、新川国民学校を臨時の病舎にあてる。 患者数は、７月に554名、８月に758名、10月に入って下火となる。
			・８月８日ソ連参戦
			・８月９日長崎に原爆投下
			・８月14日ポツダム宣言を受諾し、無条件降伏
			・８月15日戦争の終結を告げる玉音放送、戦後が始まる。
			・10月露天商を中心とした闇市出現

時　代（年代）		西　暦	記　　事
			・豊橋市議会で狭間国民学校の廃校を議決する。
昭　和	22　年	1947	・市内新制中学校　10校開校　６・３制の実施
〃	24　年	1949	・12月31日狭間小学校廃校
〃	25　年	1950	・１月９日狭間小学校児童480名は、教員12名に引率されて松山小学校へ編入された。城海津地区の児童41名は松葉小学校へ
			・１月８日松山小学校の校章制定、図案は、合併当時の校長である坂口菊夫氏の制作と伝えられている。
			・３月民衆駅新築、総工費の70％地元負担、階上に市民出資の百貨店がつくられる。
〃	28　年	1953	・４月総代会発足
			・浜松～名古屋間の電化完成、「特急はと」が停車する。
			・台風13号襲来により東三河被害甚大
〃	29　年	1954	・豊橋祭り始まる。市民総おどりが広小路で行なわれる。
〃	32　年	1957	・７月牛川原人の左上腕骨発見、成人女性と推定される。
〃	34　年	1959	・町名の大変更を行なう
			・伊勢湾台風が襲来し、県下に甚大な被害を与える。
			・２月牛川原人第２人骨発見、成人男性と推定される。
〃	39　年	1964	・東海道新幹線開通
〃	40　年	1965	・ほていやが駅前に進出、昭和５１年撤退する。
〃	42　年	1967	・駅前大通歩道橋、３月東小田原歩道橋、10月中柴歩道橋架橋
〃	45　年	1970	・広小路通りで歩行者天国始まる。
			・大豊商店街水上ビルに移転
〃	46　年	1971	・駅前大通りにスーパー長崎屋が出店、昭和53年撤退
〃	47　年	1972	・ダイエーが広小路通りに出店、平成10年５月31日撤退
〃	49　年	1974	・駅前大通りに豊橋丸栄が出店する。
〃	56　年	1981	・中部地区市民館が平成５年４月中消防署内に移転
〃	57　年	1982	・豊橋鉄道市内線の路線が、井原から運動公園まで600m延長する。
平　成	元　年	1989	・狭間小学校卒業生により学校跡地に二宮尊徳像が建てられる。
〃	4　年	1992	・松山校区市民館開館
			・松山小学校創立80周年・校舎竣工記念式典挙行
〃	8　年	1996	・豊橋駅を橋上駅に大改修、駅の設備は平成９年３月完成する。
〃	10　年	1998	・豊橋鉄道市内線がペデストリアンデッキ下まで路線を延長
〃	11　年	1999	・９月24日竜巻が発生し、人的､物的に大きな被害を受ける。
〃	13　年	2001	・４月１日、土地区画整理により花田町字石田の町名を抹消し、前田南町２丁目との合併届出
〃	16　年	2004	・駅前大通り歩道橋撤去、平成17年３月駅前大通り停留所開設

参　考　文　献

はばたく松山	豊橋市立松山小学校
とよはしの歴史	豊橋市
創立80周年校舎竣工記念誌	松山小学校創立80周年記念誌編集委員会
統計で見る豊橋の90年	豊橋市役所総務部行政課
豊橋いま・むかし	森田彰著
豊橋の60年	豊橋市役所企画部広報公聴課
ふるさと松山	松山校区社会教育委員会
広小路物語―豊橋駅の変遷と広小路通り　90年の歩み　広小路２丁目２番地	縣栄一
竜巻の記録　豊橋を襲った黒い渦　1999.9	豊橋市消防本部災害対策課
ふるさとの風景展	豊橋市二川本陣資料館
福岡校区史	豊橋市福岡校区
表紙、本とびら、文中の挿し絵等	伊奈彦定先生御提供

編　集　後　記

市制100周年を迎えるにあたり、記念事業の一環として、「校区史」を編集することになりました。もとより浅学非才、この任でない者であるにもかかわらず、編集委員として本史の編集を任されたことは、この上ない光栄なことであると同時に、その責任の重さに身のふるえる思いで編集作業にあたってまいりました。幸いにも委員の皆様方のご協力とご指導を得、かつ、指導的立場におられる先輩方が編集委員の仲間として、なにくれとなくお導きいただけたので、ようやく発刊にこぎつけることができました。

歴史とは、その時代、時代を真剣に生きてこられた先人の尊い実績の集積であり、さらに、これら先人の残された「心」を将来に完全に継承していくことも歴史の一環であると痛感しました。限りなく継承されてこそ歴史の歴史たる所以があるものと思います。

本誌をできるだけ充実したものにしようと、あの記事も、この数字もとどめておこうと思いつつも、出来上がってみると、意を満たさないというか、今ひとつ満腹感がないのです。しかし、この活字の中から先人の功績を偲び、今後の発展の一助にでもなれば望外の喜びです。なお、編集にあたって、各関係機関の発刊書を参考にさせて頂いたのみならず、文章を引用させていただきました。ここにお詫びを申し上げるとともに深謝いたします。

最後になりましたが、ご指導を賜りました松山小学校の作中久雄校長先生、尾崎弘明教頭先生、中部中学校の武藤祐壹校長先生、鳥山房夫教頭先生、豊橋市役所情報システム課長の雪吹守男様、豊橋市民病院事務局管理課主幹の倉橋義弘様に深甚なる敬意を表します。

平成18年８月吉日

松山校区史編集委員会
委員長　河　合　幸　一

松山校区史編集実行委員

編集委員

縣　栄一（広小路２）	浅井　敏弘（前田南２）	浅井百合子（駅大通１）
芦原　忠一（松葉１西）	天野　昇治（中柴）	大野　美治（駅大通２）
岡田　典子（駅大通３－１）	粕谷　正博（松葉１東）	金田　好正（大国）
河合　幸一（中松山）	河合　牧夫（新本２）	佐藤　昭（東小田原）
神藤　一夫（駅大通３）	菅沼　忠男（西松山）	杉田　重勝（大手中柴）
鈴木　博（新本３）	千賀　欣松（南松山）	高津　政義（広小路３）
寺部　政雄（前田南１）	伴　実（広小路１）	広瀬　正男（花園）
馬島　啓滋（東松山）	村田　一義（前田南２）	森　博勇（萱町）
八木　一好（西小田原）		

校区のあゆみ　松山

平成18年12月25日発行
編　集　松山校区総代会
　　松山校区史編集委員会
発　行　豊橋市総代会
印　刷　株式会社 ぎょうせい

R100 古紙配合率100%再生紙を使用しています
PRINTED WITH SOY INK Trademark of American Soybean Association

2006年
市制100周年
100th Anniversary Toyohashi City
つながり ひろがる 未来 豊橋